
コードギアス反逆のルルーシュ 幻影のライ

サカガミ ヤスヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス反逆のルルーシュ 幻影のライ

【Nコード】

N1954F

【作者名】

サカガミ ヤスヒロ

【あらすじ】

テロに巻き込まれたルルーシュが王の力、ギアスを手に入れたことから、反逆を開始する。「スーパーロボット大戦G・U」に準拠のコードギアスエフストーリー。ゲーム版の主人公のオリキャラ化、それに伴う所々の修正はありますが、ほとんど本編準拠。なので、詳しく知りたい方は公式サイトへどうぞ。」

STAGE 1：監視者 part 1（前書き）

あらずじにも書きましたが、コードギアスのIFストーリーです。
修正を入れていない箇所は本編準拠なので、カットしています。
ですから、本編を見ていないと、解らない箇所があるかもしれません。

御要望があれば、そこも追加したいと思います。

STAGE 1：監視者 part 1

その日、僕は生徒会メンバーと一緒に昼食をとっていた。男子生徒は僕一人なので、周りから見ればちよつとしたハーレムだが、実際はそうでもない。

「そう言えば、ルルーシュとリヴァルは？」

和やかに進んでいた会話は僕の一言でここにはいない二人の男子生徒の話題へと移っていった。

「ルルーシュをリヴァルが連れだしてる。」

ちよつと落胆した様子な女の子、シャーリー・フェネットが愚痴る。それに応じたのは我がアッシュフォード学園の生徒会長、ミレイ・アッシュフォードだ。名字で分かるように彼女はここの経営者、アッシュフォード家の人間である。

「また代打ち？ チェスかな？ それともポーカー……」

「二人とも生徒会の自覚ないんだから。お金賭けてるんですよ？ 頭いいのにルルーシュは使いかたおかしいんです。ちゃんと勉強すれば成績だって……。だいたい、ライ君は仕事しながら学校に来ていて、なおかつ成績いいんですよ。ルルーシュはもつと楽なはずです。ライ君もそう思わない？」

かわいい顔をむつとさせながら、僕に訴えかけるシャーリー、ああ、ルルーシュ君は幸せ者だよ、こんなかわいい子に、心配してもらえるなんて……。

そんなことを考えながら僕は同意する。

「確かに、一理あるね。」

「でしょ？」

「うちのルルーちゃんは、本当はまじめな子なのにかわいいねえ。」
「そうやってシャーリーを茶化すミレイさんも、ルルーシュのことについて黙認している。学生が賭けをやっているなんて知れたら、大事なものにも関わらず。」

やっぱり、ルルーシュのことを想っているのだろうか？・・・普段が普段だけになんとも言いが。まあ、気があってもおかしくないだろう。

というわけで、女性二人はルルーシュのことが気になっていて、さらに、さつきから喋っていない、メガネの女の子、ニーナ・アインシュタインは男性よりも本や研究が好きそうなので、結果的に僕はハーレムでも何でもない。

まあ、どうでもいいことかもしれない。こうやって、楽しく会話で来ているだけでも、よしとしよう。

突然、携帯が鳴った。相手は仕事先の上司からだった。一度携帯を切る。

「すみません。ミレイさん。軍から呼び出しが掛かりました。」

「あら、残念ね。午後の授業は出られそう？」

「いえ、残念ながら無理でしょう。先生方には・・・。」

「ええ、連絡しておくわ。」

「はい、お願いします。」

そう言って、僕はその場を後にする。そして、携帯を掛け直した。口調を仕事のそれへと変化させる。

「ああ、私だ。すぐにそちらに向かう。」

ライがその場を去ると、シャーリーは誰にともなくつぶやいた。

「ほんと、ルルもライ君見たいに真面目に生きればいいのに。」

「ほんとよねえ。いつそ、ライ君に乗り換えちゃえば？」

「何言ってるんですか、会長！？そりゃあ、ライ君はかつこいいし、真面目だし、運動できるし・・・でも、私は彼のことをそういう風には・・・。」

シャーリーはあわてた様子で、ミレイの言葉に答える。シャーリーの言ったことは事実である。実際、彼にはファンクラブさえ存在し、その女性人気はルルーシュと互角だ。

「冗談よ。あなたがルルに夢中なのは火を見るより明らかだから。」

ミレイがほほ笑みながら言うと、シャーリーは顔を真っ赤にしな
がら、俯いてしまった。

二人だけがキョトンとしながら、ご飯を食べていた。

S T A G E 1 : 監 視 者 p a r t 1 (後 書 き)

お楽しみいただけましたでしょうか？
文才が乏しいので、うまく伝わっていると嬉しいです。

STAGE 1：監視者 part 2

「ロイド博士。見つかったようですね。」

「ようやくね。これで、君の専用機も作り始められるよ。」

ロイド博士は嬉々としている。

「でも、よろしいんですか？その、日本人をデヴァイサーにしてしまつて。」

現場に向かうトレーラーの中で、僕は詳細を聞いていたのだが、セシルさんは何か問題があるような口調だ。

それにしても、僕の前だからつて、日本人なんて言う必要のないに、気を使っているのだろうか？

「別に、問題ないでしょう。能力がある者ならだれでもよいと、指示を出したのですから。」

「それなら、構わないのですけど・・・。」

セシルさんは、僕の言葉に納得してくれたが、しかし、彼女の言うことも一理ある。これはブリタニアの国是に抵触することだからだ。まあ、いいわけならいくらでも思いつくので、全く気にしてはいないし。それに、目的のためには日本人の方がいい。

「それで、どうします？ストレイド卿」

「そうですね。変に委縮されても困りますし、僕の身分は隠しましよ。」

「わかりました。じゃあ、それ用の口調でお願いしますよ？」

「わかつてますよ。お二人の方もよろしく願いますね。」

僕の身分を隠すことは、前々から話し合われていたことだ。

まず、自慢ではないが、僕自身、かなり高いポストに就いている。つまり、命を狙われる可能性が高いのである。さらに、身分を公表すると厄介なことになる任務にも就いているからだ。

それに、その日本人のデヴァイサーとも仲良くしたいしね。

現場についてみると、事態は全く予想外の方向に向かっていた。

「どうやら、前線に投入されたようです……。」

「ロイドさん。ちゃんと手配してくださいよ。」

セシルさんの報告を聞いて、僕はひどく落胆してしまった。前線投入ともなれば、死亡する確率は高くなるし、毒ガスが散布されているという情報もある。

「したよ。でも、仕方ないでしょ。はあ、でも、デヴァイサーがないんじゃない……。」

ロイドさんもがっくり来ているようだ。

「仕方ない。僕の名前を出して、救援を……。」

そこに一人の兵士が駆け込んできた。

「枢木スザクと思われる男を確保しました。」

ふうと胸をなでおろしたが、その次の言葉を聞いて、愕然となる。

「しかし、銃で撃たれています。いかがいたしますか？」

「何！？すぐに救護を。出来れば、こちらのトレーラーに運んでくれ。」

「イエス、マイ・ロード」

兵士は駆け足で去っていった。僕はロイドさんとセシルさんに視線を向けて、意見を求める。

「私は、中止すべきだと思います。けが人を乗せるなんてできません。」

セシルさんは真剣に言ってくる。僕もそれに同感だ。僕の専用機はゆっくり作っていけばいいのだから。でも、ロイドさんは反対だろうな。

「僕は、実行したいな。めったにない機会だからね。」

こちらにも、正論。ゆっくり作っていけばいいといっても、完成しないのでは意味がない。セシルさんが食ってかかる。

「けど、ロイドさん！」

「だけどね、これ、最終的にはライ君の判断だから……。」
その通りだ。これは、僕が決めるべき問題だ。だけど、けがをし

ている人間を乗せるのはどうしても気がひけた。だから・・・。

「ロイドさん。枢木一等兵にデヴァイサーの話は？」

「してないけど？」

「わかりました。それじゃあ、彼自身に決めてもらいましょう。乗るか、乗らないか。」

僕は卑怯なのだろう。でも、これは重要なことだ。そう、乗るのだとしたら、彼の運命は確実にこじれていくだろうから。それを強制してはいけない。

「日本人の虐殺を黙認しておいて、最初から強制的に乗せるつもりだったやつが何を考えてるんだろう。」

「ライ君。なにか言った？」

セシルさんが怪訝な顔をしている。口に出ていたようだ。僕は笑顔で答える。

「大丈夫です。なんでもありません。」

幸いにも、枢木の怪我は銃で撃たれたにしては軽微だった。これで、罪悪感も少しは減るというものだ。とことん僕はひどい奴だな・・・。

「まだ、起きそうにないねえ。」

早く、ランスロットを動かしたいのだろう。ロイドさんの言葉にうずうずとしたものを感じる。

「このままだと、戦闘終わっちゃうよ。」

「それはそれで、仕方ないんじゃないですか？ けが人を乗せなくて済みますし。」

まあ、その時はその時だ。しかし、セシルさんは、本当にやさしい人だ。そして、聡明で美人だから、引く手数多なんだろうな、料理のセンスさえ悪くなければ・・・。思い出すと気分が・・・。

「何か？」

セシルさんににらまれる僕。笑顔が怖いです。

「いえ、セシルさんは優しいなと思っただけです。」

「・・・それならいいですけど。」

納得はしていただけたようだ。

「うーん。」

ベッド替わりのベンチから、唸り声がする。会話がうるさかったのか、枢木が起きたようだ。

「残念でした！天国に行きそびれたようだね。枢木一等兵。」

枢木はキョトンとしながら、ここはどこか尋ねてきた。それに答えながら、ロイドさんと、セシルさんが枢木のおかれた状況を説明していく。

その中で僕は、気になる発言を耳にした。

「ルル・・・、状況はどうになりましたか？」

ルル？ルルーシュのことか？まさかな、日本人で彼と接点があるのは、・・・まさか、だが、辻褄は合うな。まったく、これは何の因果だというんだ。

「で、この子が君と同じデヴァイサーのライ君よ。」

「はじめまして、よろしく頼むよ。枢木スザク君。」

「こちらこそ、よろしく願います。」

それでも僕は笑顔であいさつした。それにスザクも快く応じてくれた。

STAGE 1：監視者 part 3

ロイドさんたちがランスロットの準備へ向かったあと、僕だけはその場に残った。質問をしておかなければならない、先ほどの発言について。

そして、ランスロットに乗る、覚悟について……。

「もう一度聞くけど、言いのかい？ランスロットに乗るということは、完全に日本と敵対するってことだけだ。」

僕の言葉にマニユアルを読む手を休め、こちらを向くスザク。

「ああ。それに、僕は名誉ブリタニア人だ。そして、軍に入っている。もう、日本は裏切っているも同然だからね……。それよりも、君はちゃんと日本と呼ぶんだね。」

その言葉に、最初の方は一抹の悲しさを感じさせたが、最後の方は単純に驚いている様子だった。顔にもその表情が浮かんでいる。

「珍しいかい？僕はブリタニア人と日本人のハーフなんだよ。」

僕は、自嘲気味に答える。

「そうか。それじゃあ、納得だ。」

僕は、内心で驚いていた。ハーフというのは微妙な立場で、優秀でなければ、向けられる感情は侮蔑か、哀れみなのだ。優秀であっても、優秀であるがゆえに孤独になる。

日本人からは、憎悪を向けられる。名誉ブリタニア人制度で、ブリタニア国籍を取得した人間と同じ目で見られる。

だから、スザクのように単純に納得するのは珍しい。ジノやアッシュフォード学園の生徒や、特派の人たちもいるけれど、やはり、少数だ。

スザクは優しい人間なのだろう。

僕は、それを考えた上で、こう告げる。

「じゃあ、君は、日本人を殺す覚悟はあるかい？」

スザクは逡巡したようだが、返答してくれた。

「ああ、さっきも言ったけど、僕は裏切っているも同然だよ。だから、命令ならば殺すこともある。」

その言葉には、覚悟がにじみ出ていた。僕は悪いことをしたと思ひ弁解する。

「ごめん。確かに、今日みたいに戦闘に出ることもあるけど、基本的には技術開発だから。そこまで気にする必要は無いよ。」

「でも、開発するのは、兵器だろ？」

確かに、その通り。そこまでわかつているなら、もうこれ以上、聞く必要はないだろう。真面目なやつだ。そこが、長所だろうけど、融通がきかないところもありそうだ。

「その通り。わかつてるならいいんだ。ところで、さっきの、ルルってというのは君の友達かい？」

「え？」

先ほどといい、顔に出やすい性分なのだろうか。とても、驚いているようだ。

「なんのことかな？」

しらを切るつもりだろうか。驚いた表情を見せた後に言っても、説得力はないぞ。

「そうかい？僕はてつきり、友達かと思ったんだけど。」

「僕はそんな人、知らない。」

「人なのかい？ルルというのは？動物とかじゃなくて？」

しまったという、顔をするスザク。単純な誘導尋問だ。こんなにあつさり引つかかるとは思わなかったが・・・。

「実を言うとな、僕は君の言ったルルに心当たりがあるんだよ。だから、僕も心配なんだ。だから、教えてほしい。何が起きているのか。」

スザクは、かなり悩んでいるようだ。それは、そうだろう。死亡したはずのルルーシュの存在を明かしたら、彼とその妹が政治利用されるかもしれないからだ。

まあ、実際僕も同じようなものだが。

「わかった。話すよ。」

スザクは話してくれるようだ。しかし、人を簡単に信用し過ぎるな、スザクは。後々それがあだにならなければいいんだが……。でも、僕を信用してくれるのはありがたいことだ。

スザクが話してくれた人物は、間違いなく、ルルーシュだった。だが、これでは……。ああ、ナナリーには何と言えがいいのだろうか。

「そうか、話してくれて、ありがとう。」

それで、いったん会話は途切れた。僕が黙り込んでしまったからだ。スザクもマニュアルを読まなくてはいけなかったのではなさった。

しばらくして、スザクを残して僕は外へ出た。そして、携帯を手取る。ナナリーにもだが、その前に伝えなくてはならない。

「もしもし？ シャーリー？ 実はルルーシュのことなんだが……。」

「あ、ライ君？ 聞いてよ。ついさっきルルーシュから電話があつたさ。」

「それ本当！？」

「びつくりした。本当だよ。嘘ついてもしょうがないじゃん。」

つい、大声を出してしまった。よかった。少なくとも、まだ生きているらしい。

「ごめん。それならいいんだ。ルルーシュはなにか言ってた？」

「それが、新宿付近のことについて、ニユースで流れてないかって聞かれて、交通規制だけって言ったら、切っちゃったんだ。」

「ルルーシュの奴、遅くなった言い訳にでもするつもりかな？」

「そうかも。今度ライ君からも何か言つてやってね。」

「ああ、そうするよ。じゃあ、仕事に戻らなくちゃいけないから。切るね。」

「うん。ばいばい。」

軽く会話を続けてから、電話を切る。深呼吸をし、気持ちを落ち

着ける。よし、大丈夫。

今の情報から推察するに、ルルーシュは無事なのだろう。シャーリーとの会話にも不自然さは無かったようだから、けがもしていないはずだ。

しかし、確実にこの新宿ゲッターにいる。もし、いないのなら、新宿の情報なんて求めたりしないだろうからな、彼は。

確証は全くないが、確率は高いはずだ。そもそも、この状態のゲッターから抜け出せたとは考えにくい。

情報をまとめていると、スザクがトレーラーから出てきた。ランスロットの準備が整ったのだろう。

「スザク君。朗報だ。ルルーシュは生きてるよ。」

「本当ですか。よかった。」

スザクは素直に喜んでいようだ。本当にいいやつだよ。君は。

「じゃあ、なおのこと戦闘を早く終わらせないと。」

「無茶はするなよ。」

「ええ、ありがとうございます。」

スザクははつきりと答えると、しっかりとした足取りでランスロットに向かっていく。傷は疼くはずなのだが……。

「止めるのも野暮だよな……。」

そうして、僕もランスロットのデータを見るため、ロイドさんとセシルさんのところへ駆け足で向かった。

STAGE 1：監視者 part 4

「あははは！いきなり、フルスロットルか。」

ロイドさんとはとても愉快そうに、その光景を見ている。僕もその光景を目に焼き付けずにはいられなかった。従来のナイトメアをはるかに凌駕するスピード。発進時の風で、セシルさんは立ってられないほどだった。

「すごいですね……。これで試作ですか？」

「ふふふ……。すごいでしょ！君の専用機もこれを基本にするからね。すごいことになるよ！」

どんな、機体になるのだろう。楽しみではあるが、若干不安でもある。

そうしている間にも、ランスロットは戦闘域へと突入し、一機目を撃破した。

その戦闘でランスロットは化け物じみた活躍をしたが、それは戦術的勝利でしかなかった。クロヴィス皇子から停戦命令が発せられ、戦闘は停止。おそらくその直後に、皇子は殺されてしまった。

「申し訳ございません。陛下。」

皇帝陛下との専用チャンネルで僕は謝罪した。しかし、陛下の言葉は叱責ではなかった。

「よい。過ぎてしまったことはどうにもできん。それよりも、ルルーシュとナナリーは無事なのだな？」

「はい。」

僕は、暗澹たる思いだった。ルルーシュとナナリーのひいきが過ぎる。わからないでもないが、しかし、これではクロヴィス殿下が浮かばれない。

「そうか……。次の総督だが、コーネリアを差し向けようと思う。それまでは代理の男に任せよ。引き続き、任務を頼むぞ。我が騎士、

ナイト・オブ・ファイブ。ライ・ストレイドよ。」

「イエス、ユア・マジエスティ」

そう言って、通信は切れた。そして、僕も部屋を退出する。

あとには静けさだけが残される。嵐の前の静けさが・・・。

STAGE 2：決意と魔法 part 1

僕はイライラしながら、校舎内を歩いていた。純血派のジエレミア卿が、あるうことかスザクをクロヴィス皇子殺害犯として、拘束してしまったのだ。

そして、僕やロイドさんの証言は無視するというのだ。ム力つかずにはられない。

何が『あなたはストレイド公爵の御子息ではありますが、あなた自身がその権威を振りかざしていいわけではない。』だ。正論だが、僕が言っているのはそんなことではない！！

ああ、ナイト・オブ・ラウンズの権限を使ってしまうのか・・・。そんなことを考えながら、生徒会室に入ると、何やら書類仕事に悪戦苦闘している、ルルーシュ達の姿が目に残る。僕は素早く身をひるがえしたが、遅かった。

「おはよう。ライ君。丁度いいところに来てくれたわ。」

振り向けば、ミレイ会長の笑顔と、みんなの残念そうな顔。

「はは、逃げられないですか。そうですか。」

こうして、僕も部活の予算を計算させられる羽目になるのだった。さっきのイライラは忘却するしかなかった。

なんとか、予算編成を終えて、僕たちは教室にやってきた。すると、数人の生徒がパソコンでテレビを見ながら、話している。

「どうやら、昨日の騒ぎについてのようだ。」

先ほどの、イライラがよみがえってくる。まったく、汚職でもしていてくれれば楽なのだが、あいにくとそんな情報はない。純血というだけあって、その身も清廉潔白らしい。だからこそ、よけいにイラつく、この状況を打開できない自分にだ。

「新宿？」

「昨日、この件で電話したんだよ。知り合いからリアルタイムで聞

いてて。」

シャーリーが何か気付いたようにルルーシュに目を向けると、彼はこともなげに、嘘をついた。

そう言えば、ルルーシュはどうやって、ゲッターから脱出したのだろう。謎だ。

「ふーん、その知り合いって・・・、大丈夫か？」

僕が問いたただそうと目を向けると、ルルーシュが口を押さえていた。気分でも悪いのだろうか？生徒会室にいるときは平然としていたが・・・。

「大丈夫だ。朝から仕事をさせられて、少し疲れたただけだから。」

「無理すんなよ。お前、体力ないんだから。」

リヴァルの気遣いに笑顔で答えながら、ルルーシュは洗面所で顔を洗ってくると言つて、荷物を僕に預けて、その場を離れた。

ゲッターを抜け出すときに、死体でも見たのを思い出したか、あるいは・・・。

いや、それはないだろう。動機ならあるかもしれないが、手段がない。ルルーシュが魔法でも使えるなら話は別だろうが・・・。

僕と、リヴァルが会話をしていると、珍しい光景が目飛び込んできた。学校にはほとんど出てきていない少女が登校してきたのだ。彼女が着席すると、彼女と仲の良い生徒がよっていった。久しぶりの再会を喜んでるように見える。

少女の名を、カレン・シュタットフェルト。『名は体を表す』を地で行く、病弱なお嬢様だ。

「珍しいな、明日は雨か？」

「そんなこと言っちゃてえ、気になってるんだろ？」

リヴァルのニヤニヤ顔に苦笑しながら僕は答える。

「まあね。きれいだし、それに、秘密のある女性って魅力的じゃないか？」

僕がこの学園に来た時、始業式以来だが、彼女を目にすることは

なかった。それが、何らかの秘密がある様に感じさせたのだ。全くの、妄想だが……。

「全面的に同意だ。お互い頑張ろうぜ。」

リヴァルの意中の相手は、ミレイ会長だ。確かに彼女も秘密を隠し持っていてそうではある。

「ああ、そうだな、健闘を祈るよ。」

ただ、気づいてるかリヴァル？会長はルルーシュのことが気になつてるかもしれない。という言葉は呑み込んで、僕は素直に応援する。

そこにルルーシュが戻ってくる。なぜか、彼はカレンの方を向いていた。

今のルルーシュは妹のナナリー以外は眼中にないだろうから、珍しいだけだろう……。シャーリー、君は哀れすぎる……。

「ひよつとして、惚れちゃった？それじゃあ……。」

リヴァルも見当違いだ。ルルーシュという人間の本質に気付いていない。いや、むしろ気付かない方が幸せかもしれないが……。

「違うよ。珍しいだけだ。」

やっぱりな。あ、シャーリーがこっちを見ている。でも、ルルーシュは気づいてない。ますます哀れだ……。

「ところで、さっき聞こうと思ったんだけど、ゲッターの事を教えたのって誰なんだ？」

話を転換させたくて、僕はさっきの質問をぶつけてみた。

「軍にチェス仲間がいてね。その人が教えてくれたんだよ。」

ルルーシュは冷静に返してくる。

貴族と賭けチェスをしてるくらいだ。ない話ではない。

「どこまで、聞いたんだい？」

「詳細は教えてくれなかったよ。軍規違反になるかも知れないからつてさ。」

「一応、名前を覚えてくれないか？」

軍規違反に近いことをしたのだから、注意しておきたかった。実

際にそんな人物がいればだが・・・。

「ライが軍に報告しないならね。」

「僕がまじめなのは知ってるだろう？」

「それじゃ、だめだ。」

「わかった。それじゃあ、別にいいよ。」

うまい切り返しだった。これでは僕も引き下がらざるを得ない。いつもながらに、ルルーシュには恐れ入る。

だからこそ、疑念は深まってしまったのだが・・・。

昼食をとり、理科準備室に行く途中、中庭にカレンの姿を見つけた。しかし、その姿は僕を含めて、学園生徒全員のイメージとは全く逆のものだった。

目の錯覚だろうか。今、蜂を手でたたき落としていたように見えたが・・・。何やら本当に秘密があるのだろうか。それとも、とっさに？

僕が考え込んでいると、今度はルルーシュがカレンのそばに近づいていくのが見えた。二人は二言三言を交わしている。

ルルーシュは一体何を考えているんだろう。まあ、彼も男の子だからと理由でいいような気もするが、やっぱり違和感がある。

再び目をやると、ルルーシュとカレンはいなくなっていた。僕も、その場を後にする。授業に遅れるとまずい。

STAGE 2：決意と魔法 part 2

その数日後、僕は二つの衝撃に襲われた。ひとつは、純血派によるクロヴィス殿下の遺体奪取。これは、予測の範囲内ではあったが、それでも、衝撃的な物だった。そして、もう一つは……。

「会長、ライ君。実は……。」

会長に相談事を持ちかけていたら、元氣のないシャーリーがやってきて、告げられたその発言だった。

「ルルーシュがカレンを誘った？」

僕はほぼ、棒読みの状態だ。ルルーシュも人の子だったということよりも、先を越された感が大きい。しかし、ミレイさんは余裕の表情だ。さすがといったところか。

「多分、クラブハウスに連れてきてくれるんじゃないかしら？」

その言葉の訳が分からずに、キョトンとなる。

「なんの話ですか？」

僕の疑問をすかさずシャーリーが口にくれた。そして、すぐさま、ミレイさんはその疑問に答えてくれた。

「歓迎会をするのよ。カレンのね。」

「なるほど。そのための料理ですか。」

調理場にはかなりの料理が出来上がっていた。

「ああ、私の早とちりか……。」

シャーリーも自分なりに納得したようだ。少し、バツの悪い顔をしている。

「わかりました。でも、一人で運ぶのは大変でしょう？手伝いますよ。」

「お、助かる。じゃあ、シャーリーは先に行って、リヴァルとニーナの手伝いをして。探し物があるみたいだから。」

「はい。」

元氣よく返事をして、調理場を出ていく、シャーリー。そして、

その足音が消えたころ僕は再び切り出した。

「さっきの続きですけど、僕は、どうするべきでしょうか？」

「そうねえ。助けたいんなら、助けちゃえばいいんじゃない？助けて後悔するよりずっとましよ。そう、ずっとね。」

口調は軽い物だったが、ミレイさんの言葉は、重く響いた。そうだ。僕は後悔したくない。彼を失うのは目的のためにもかなりの痛みだし……。

「ありがとうございます。参考になりました。」

僕は料理をワゴンに載せながら、お礼を言う。背中合わせのため、彼女の表情は見えない。

「どういたしまして。でも、たいしたこと言っていないから、ひとつ、おまじないをかけてあげるわ。・・・ガッツ！」

僕の背中にかけてられたその言葉は僕の決意を固めさせてくれた。

僕は振り返って、最高の笑顔で告げる。

「ありがとう」

僕とミレイさんがクラブハウスに入ると、ルルーシュとカレンはキョトンとしていた。

あれ？聞いてたんじゃないの？

「あれ？知ってて連れてきてくれたんじゃないの？」

おいおい、ミレイさん。それじゃあ、やっぱり、ルルーシュはカレンを好きってことか？そうなのか？

まあ、それなら奪い取るだけだ。つて、僕は何を考えてるんだ？料理を並べながら、ミレイさんが経緯を解説し、自己紹介をしてから、僕に話を振った。

「ライ・ストレイドです。カレンさん。あなたの加入を心から歓迎します。」

ちよつときざっぱかったかな？

そのあと、みんなが自己紹介して、会は滞りなく行われるかに思われたが、そうはならなかった。

カレンがシャンパンを頭からかぶってしまったからだ。

余談だが、ナナリーが出てきた時の言動はやはり、ルルーシュがナナリーのことしか頭にならないような気にさせた。

十数分後、シャンパンを浴びて、びしょ濡れになったカレンが着替え終え、戻ってきた。暇つぶしのために見ていたテレビでは、報道特別番組が流れている。内容は、クロヴィス殿下の殺害。そして、その実行犯の逮捕だった。

僕以外の全員がそのニュースに驚いている。なかでも、ルルーシュの驚きようは半端なかった。

スザクが逮捕されたんだ。びっくりもするだろう。

僕が二人の関係を詳しく知ったのは、面会時間にスザクに直接聞いたからで、スザクは拘束されていてもルルーシュの無事を喜んでいた。

そして、スザクはこうも言っていた。真実が明かされるのが法廷で、そうでないなら、そうでない世界なら未練はないと。そんな悲しいことを言っていたんだ。

そのことを思い出し、僕は、再び覚悟を強固にする。そう、僕は君の無実を知っている。

君は必ず救い出す！！

STAGE 3：仮面のゼロ part 1

「本当にやるのかい？」

ロイドさんは呆れているのだろうか。諦めているのだろうか。静かな言葉で声をかけてくる。僕は、専用に改良されたグロースターに乗り込んで準備を進めながら、ロイドさんの言葉に心静かに答える。決心が揺らぐことはない。

「はい。すみません。結局、身分を名乗ることになりそうだ。」

「もっと、穏便なやり方はないの？」

セシルさんは心配なのだろう。声にも顔にもその感情がにじみ出ている。

「大丈夫ですよ。一応、ナイト・オブ・ラウন্ズの端くれですから。」

そうだ、僕はナイト・オブ・ラウন্ズ。ラウন্ズの戦場に敗北はない。そう自分に言い聞かせ、気持ちを鼓舞する。

作戦はこうだ。スザクは今夜、軍事法廷に移送される。僕は軍事法廷の目の前に陣取り、一騎打ちの決闘にて、スザクの解放を要求する。もちろん、このときにナイト・オブ・ラウন্ズであることも明かす。

もしかしたら、それだけで済むかもしれないが、おそらくそうはならないだろう。僕がナイト・オブ・ラウন্ズであることはまだ発表されていない。一部の人間だけが知る事だからだ。

しかし、失敗はあり得ない。ジェレミアという男は必ず、この要求をのむはずだ。

まず、いいのか悪いのかは別として、彼は純粋な騎士であるから、決闘は神聖なものであり、そこでの約束は絶対であるはず。そして、ナイト・オブ・ラウন্ズを騙っていると判断すれば、なおのこと成敗しようと決闘にのってくるはずだ。

まあ、騎士の誇りもなく、ただ、全員で押しつぶそうと攻撃する

なら、全員撃破してやるまでだ。そんな奴らに、僕は絶対に負けない。

そして、僕がハーフであることも関係してくる。僕は、父はブリタニア人、母は日本人のハーフだ。純血派はそんな僕を排除したいと思っているに違いない。そもそも、僕の証言が聞き入れられなかったのも、ハーフであることが要因であるのだ。さらに、これも僕がラウンズを騙っていると判断されやすい要因になると思う。

僕に流れる血に関係なく、実力を認めて取り立ててくださった、皇帝陛下には申し訳ないが、でも、僕は救いたいと思ってしまったのだ。

それに、人ひとり救えないで、国を変えられるとは思わない。だから僕は行く。彼を助けるために。

「無事に戻ってくるんだよ。そのグロースターだって、大事な備品なんだから。それに、君も得難いデヴァイサーなんだからね！」

ロイドさんらしいな。それでもありがたい言葉だ。

「もう、ロイドさん！ライ君、無事に戻ってきてね。」

「行ってきます。」

セシルさんの言葉に答えて、僕はグロースターを発進させる。

スザクを乗せた車はちょうど中間地点にある橋にさしかかっていた。今から行けば十分、間に合うはずだ。

しかし、結果として僕は間に合わなかった。

僕は予定地点にはついていて、あとはジェレミア達を待ち受けるだけなのだが……。予定外のこと起きてしまった。

それは、僕より先に、スザク奪還に動く人間が現れたことだ。

STAGE 3：仮面のゼロ part 2

スザクは沿道の人々から、様々な罵詈雑言を浴びせられていた。全く、ブリタニアも底が知れるというものだ。あいつは無実なんだ。それを今から俺が証明してやる。

そうだ、引き返すべき道は、いない！

第3ストリートから本線に合流し、クロヴィス皇子の御霊車が護送車両に近づいていく。護送車両は完全に停止し、その接近をなすがままにしている。

そして、御霊車は護送車両の前で完全に停止する。それに合わせて、ジェレミアは、その御霊車に威嚇の言葉を発する。

「出て来い、殿下の御霊車を汚す不届き者が！！」

すると、御霊車の一部が燃え上がり、手品のように仮面をかぶった人間が現れ、その姿にどよめきが起こる中こう言い放った。

「わが名はゼロ」

観衆のどよめきは収まらない。その登場があまりにも鮮烈だったからだ。

「もういいだろう。ゼロ。君のショウタイムはおしまいだ。」

それ以外に何も言葉を発しないその人物に、ジェレミアは業を煮やしたのか、サザーランドで取り囲ませる。その上で、さらにこう告げた。

「さあ、まずはその仮面を取ってもらおうか？」

ゼロと名乗る人物は素直にそれに従うかのようなそぶりを見せたが、仮面は外さず手を掲げ、指を鳴らした。

するとどうだろう、ゼロの乗った車の後部が割れ、中からカプセルのようなものが現れたではないか。

それは、テロリストに奪取された毒ガスのカプセルだった。

ジェレミア達は驚愕し、ひるんだ様子を見せる。それはゼロが、

観衆にはそれと悟らせずに、観衆をジェレミア達に有効な人質たらしめることに成功したことを意味していた。

ジェレミアは銃でゼロを威嚇するが、そんなものは今のゼロにとって脅威でも何でもない。

あえなく、ジェレミアは銃を下ろし、ゼロの要求を聞いてしまった。

要求は、カプセルとスザクの交換。しかし、そんなものは受け入れられるはずがない。クロヴィスの殺害容疑者を渡すわけにはいかないからだ。

それが真実であつたなら、ジェレミアの判断は正しかつたのかもしれない。

しかし、それは真実ではない。だから、彼は聞くべきではなかつたのだ。ゼロの要求など。

「違うな、間違っているぞ。ジェレミアくん。犯人はそいつじゃない。」

そして、ゼロは決定打となる一言を言い放った。

「クロヴィスを殺したのは、この私だ!!」

さらなるどよめきが起こる。目の前でしかも、堂々と大胆不敵にクロヴィス殺害を言い放つたのだ。驚かないわけがない。混乱しないわけがない!

「イレブン一匹で尊い多数のブリタニア人の命が救えるんだ。悪くない取引だと思うがな。」

ゼロはさらに堂々、言い放つ。ジェレミアは焦って、ゼロに銃口を向けさせるが、それは愚行でしかなかった。

「いいのか、公表するぞ、オレンジを……。」

ジェレミアの困惑の表情など誰も見ていなかった。彼らが見ていたのはゼロだけだ。

ゼロは車を近付けながら、なおも、ジェレミアに何か問題があるかのようにふるまう。

そして、最後に、ゼロはこう言い放った。

「私たちを全力で見逃せ、そっちの男もだ。」

その言葉と同時に、ジェレミアはスザクの解放を指示。部下が困惑するのも構わずに、スザクをゼロに渡してしまう。

観衆は非難ごうごう、まったくもって、正しい反応を示している。そして、部下たちもそれは同じだった。

しかし、部下の動きより早く、ゼロはカプセルからガスを噴出させ、その場から素早く脱出する。

部下たちが追おうとするのは、ジェレミア自身が完全に阻止してしまう。

数分後、どうしようもなくなったかと思われたその時、一機のグロースターが颯爽と現れ、ジェレミアのサザーランドに突進する。

ジェレミアはライフルで応戦するが、そのことごとくが、幻をすり抜けるかのようにかわされる。

グロースターはライフルを自身のランスで弾き飛ばす。

「おのれ！貴様何者だ！」

「ライ・ストレイドだ。ジェレミア！なぜ、テロリストを追わない！？」

「奴らは、全力で見逃さなくてはならん！！」

その言葉と同時にサザーランドはトンファーで突進してくるが、神速の槍さばきではじき返す。そこに、スラッシュハーケンを繰り出し、戦闘不能に追い込む。

「皆さん。妨害はなくなりました。テロリストを追ってください！」

「しかし、ストレイド卿……」

「責任は私がとる！」

ライの言葉があり、それでようやく動き出すことができたが、しかし、時すでに遅しというやつだろう。

一つ言えることは、確実にジェレミアの命運は尽きたということだ。

「見損ないましたよ。ジェレミア卿。一時的にですが、あなたを拘

束させてもらいます。」

グロースターのパイロット、ライ・ストレイドの悲しみと怒りに満ちた言葉がコクピットに響く。

「スザク、すまない。君を救えなかった。」

しかし、その言葉は誰にも届かなかった。

STAGE 3：仮面のゼロ part 3

僕、枢木スザクと逃げ切ったゼロたちは、廃墟に身を寄せていた。ゼロ自身は僕と二人きりで話し合うために、他の人間を下がらせている。

「そうとう手荒な扱いを受けたようだな。奴らのやり口は解つたろう。枢木一等兵。ブリタニアは腐っている。」

確かに、そういう一面があることを僕は否定しない。いや、否定できない。

「だから、君が世界を変えたいと思うなら、私の仲間になるべきだ。」

だが、僕はその意見に賛成できなかった。僕は知っていたから、僕に優しく接してくれた人たちのことを。だから、知る必要があった。ゼロが何を考えているのかを・・・。

僕は言った。

「君がクロヴィス殿下を殺害したのか？」

「これは戦争だ。敵将を討ち取るのに理由があるか？」

確かに、戦術的には正しい。

「毒ガスは？民間人を人質にとって・・・。」

これは、確かに戦術的には正しいのかもしれない。けども、人道的には・・・。

「交渉事にはブラフは付き物、結果的には誰も死んでいない。」

「結果、そうか。そういう考えで・・・。」

「私のところに来い、ブリタニアはお前の仕える価値のない国だ。」

僕は笑いだす。おかしくてたまらなかった。

「何がおかしい。」

「馬鹿じゃねえの。お前。」

「!？」

「ブリタニアに仕える価値がない？そんなのは、お前が決めること

じゃねえ！俺が決めることだ。それと同時に、お前についていくメリットがどこにあるんだ？俺は頭が悪いんでよく分からないんだ。教えてくれないか？」

俺はその口調を昔のものへと戻していた。この考えが甘い奴は、昔の自分を見るようで、どうしても気に障る。だいたい、人を仲間に誘おうというのに、仮面を外さないのが気に食わない。俺はゼロの言葉を待たずに続ける。

「だいたい、結果がどうか言ってたが、いつも、てめえの思い通りの結果になるなんて思ってるのか？そんなことは無いぞ。むしろ思い通りに行くことの方が少ないだろ。もし、そうなったとしても、てめえは、前へ進めるのか？ああ？」

「それは・・・。」

気押されているのか？さっきの騒ぎで動じなかったやつが？

くく、どうやら覚悟はできていないようだ。なら、とどめといこうか。

「無理、限界！お前と話すなんて時間の無駄だ。まあ、お友達の勧誘は間に合ってるってことであきらめてくれよ。じゃあな。」

俺は、かなりすつきりしながら、ゼロに背を向ける。

「さて、どこへ行く？」

うるさいな。どこに行こうと勝手だろうに。しつこい奴は嫌われるといふ格言を知らないのだろうか？

「軍事法廷だよ。あと一時間くらいで始まるからな。」

ゼロは驚愕したように俺を止める。

「馬鹿か、お前は？あの軍事法廷はお前を犯人に仕立て上げる為のものなんだぞ。」

こんな、馬鹿な恰好をしている奴に馬鹿呼ばわりされて、再びムカツとくる俺。まあ、最初に馬鹿と言ったのは俺だがな。

「それでも、それがルールだ。俺がいかねえと、弾圧が始まる。それじゃあ、寝覚めが悪くしょうがねえ。それとも、それでいいっていうのか？それじゃ、なおのことだめだ。全然だめだぜ！そりゃ

あ、お前が日本人の為に闘う意思がないってことだろ？そんな奴について戦うくらいなら死んだ方がましだ！」

「馬鹿だ。お前は！」

また馬鹿呼ばわりか、本当に腹の立つ奴だな。まあ、感謝の一つもしといてやれば、もういい加減でまるか？

「は！とても癪に障るが、お前のおかげで、おそらくは大丈夫だ。頭の切れる上司もいるしな。だから、混乱を起こしてくれたことには礼を言っておく。ありがとよ。まあ、生きて会うことがあったらそれは戦場だろうから、その時はよろしくな。」

そう言つて、俺はその場を後にした。ゼロから言葉はかからない。ようやっと、黙ってくれたようだ。

俺は裁判所への道を堂々と歩いて行つた。

STAGE 4：契約 part 1

俺は、落胆し、打ちひしがれながらもようやくクラブハウスに辿り着く。あんなにも拒絶されるなんて考えてもみなかった。

だが、いいだろう。今後、まだまだチャンスはあるはずだ。スザクを助ける足がかりを作ることができただけでも良しとしよう。

しかし、そんな思いもリビングに入ると、一掃されてしまった。

そこにはナナリーのほかに、死んだはずの緑髪の女がいた。無事だった？ありえない。こいつは頭を撃ち抜かれたはずだ。

二人は何か言っているが、俺はそれを聞いてはいない。必死に考えていた。何通りもの考えが浮かぶが、そのどれにも確信が持てない。いくつかはオカルトじみてもいる。

「お兄様？せつかくC・C・さんが来られたのに……。」

ナナリーの言葉で俺は、思考をいったん止める。

「C・C・？」

奇妙な名前だ。イニシャルか？それとも……。

ナナリーの言葉に適当に答えながら、思考を展開していきながら、俺は聞き捨てならない言葉を耳にする。

「将来を約束した仲だ。な？」

「は？」

この女はいったい何を言っているんだ。契約……。そういうことなのか？スザクに拒絶されて苛立っていたこともあり。俺はC・C・を少しからかいながら探ってやることにする。

「なんだ？契約というのは、そういうことでいいのか？簡単だな。」
「お前が、そうしたいならしてやってもいいぞ？」

C・C・は、狼狽した顔一つ見せずにこう告げる。つまらないやつだ。

なるほど、これは契約ではないのか。だが、お前は矛盾している。「そうしたいなら、してもいいって、ひどいな。将来を約束した仲

「だろ？俺たちは？」

「私が要求するものとは違うが、契約内容に加えてもいいと言ってるだけだ。」

「すぐさま、矛盾をつぶしてきたか、相当頭が切れるな、この女・・・。そろそろ潮時か？」

「そうか、ところでナナリー。実は彼女は冗談が・・・。」

「嫌いだ。」

「けど、人をからかうのは好きなんだ。ミレイさんと同じにね。」

「そうなんですか？」

「ごめん、ちよつとからかったただけだから。それじゃあ、Ｃ・Ｃ。ついてきてくれるか？」

俺はＣ・Ｃに言葉を告げさせずに、会話を終了させて、彼女の腕を引つ張って、リビングを出るのだった。

自室につくと、俺はＣ・Ｃをベッドに放り出し。問いただす。

「誰だ、お前は？」

「この女はふてぶてしく返答する。」

「言ってただろ？Ｃ・Ｃと。」

俺はイライラしていた。スザクに拒絶されたばかりでなく、こんな女まで転がりこんで・・・。あまつさえ、ナナリーは誤解をしているかもしれない。

自然と語気は荒くなっていた。

「そうじゃなくて、お前は・・・。」

「死んだはず、か？氣に入ったか？私が与えた力は。」

「どうやら、俺にギアスを与えた本人で間違いないようだが・・・。」

「やはり、お前が・・・。」

「不満か？」

「いや、感謝してるよ。俺のスケジュールを大幅に前倒ししてくれたしな。」

俺は事実を述べた。動き出す時期は分からなかったが、この力のおかげで、様々なことを簡単に行えるようになった。たとえば、資

金は貴族に命じて、わからないように、俺の口座に振り込ませていたりする。

「スケジュール？」

「ブリタニアを壊すスケジュールだよ。」

「壊せると思うのか？その力だけで」

「壊すだけならな……。それに、この力がなくてもやるつもりだった。」

その場合は、仲間を集めたりしなくてはいけなくなっていた。だが、この力があれば、そんなものは別になくてもいい。ナナリーの居場所くらい簡単に作れるだろう。

まあ、それはただ壊すだけを目的とした場合だが、それだけではない。

もちろん、ナナリーの居場所を作るのが最優先事項だ。しかし、俺は見返したい。そして、許したくない。救えるはずの母を見殺しにし、目の見えないナナリーと俺を極東に追いやった皇帝を。そして、その間、のうのうと暮らしてきた兄弟たちを……。

「見込み通り、面白い男だな。お前は。」

「ところで、どうする？お前、行くところないんだろ？それに追われているみたいだし……。」

「追われているのは、軍の一部だけだ。普通に隠れていればいい。」

おもむろに、拘束着を脱ぎだすC・Cにびっくりしながらも、俺は目を背ける。

「ここで、いいのか？ちゃんとした客間もあるが……。」

「かまわん。男は床で寝ろ。」

「いいのか？一緒の部屋で？」

俺を男として見ていないのだろうか？こんな奇妙な女だが、それはそれでシヨックだ。

「それと。確認だが、契約とは……。」

「お休み、ルルーシュ」

有無を言わずに、眠りにつくC・C。経験則として、こうい

う手合いには、何を言っても無駄だ。ミレイさんと同じで……。まあ、命の恩人でもあるから、扱いは丁重にしてやるとするか。資金なら無駄にあるし。

それにしても、着替えとか必要だよな。女の子の服か……。咲世子さんにでも相談しよう。俺は拘束衣を片づけながら、そう思った。

STAGE 4：契約 part 2

「福島、高知、広島」

セシルさんが言っているのは、ゼロに続けと蜂起事件が起こった地域だ。もう、七件も被害が報告されている。

そのため、僕は学園には行けずに、仕事に忙殺されていた。まあ、自分でも勉強はしているが、テストの自信はない。特に歴史。論述式で意外とマニアックな問題が出てくるのだ。

「まったく、ライ君。君も大変だね。ジェレミア卿があんなことになってしまって、いい迷惑なんじゃない？僕もいい迷惑だけだね。研究が進められないし。」

ロイドさんに言われて、僕もため息をつく。その意見には全面的に同意だ。皇帝陛下からラウンズとして統治せよと、ご拝命を受けたので、軍内部だけには、僕がラウンズだと知れている。楽は楽なのだが、コーネリア殿下にいい形で引き継ぎを行わなければならぬプレッシャーから、気がまったく抜けやしない。

そして、僕の身分を隠すために、一般人には、ロイドさんが統治していることになっている。ロイドさんはこれでも伯爵で、ジェレミア卿より地位は上だ。

「はあ、まったく、ジェレミア卿には失望させられましたよ。」

「でも、ライ君が調べた時には何も出なかったんでしょ？」

セシルさんは違和感があるのか、それとも、ジェレミアを憐れんでいるのか、彼を弁護するかのような口調だ。

「僕が見つけれなかっただけです。その存在を否定することはできない。」

「悪魔の証明だね。」

さすが、ロイドさんは物知りだ。そう、僕の知らない証拠Xが存在しないことを証明するのは不可能なのだ。

「ですけど……。」

「じゃあ、ジェレミア卿の異常な行動はどう説明するんです？ゼロが魔法か超能力でも使ったと言っんですか？」

まあ、その魔法か超能力が存在しないことを証明するのも不可能ではある。

しかし、その存在を証明しない限り、とりあえずはそんなものはないと受けとられてしまっだろう。現段階では……。

そして、ジェレミア卿は左遷されるかもしれない。……もう一度調べてみるか。

「確かに、荒唐無稽ではありますが……。」

「わかりました。もう一度調べてみますよ。」

僕が言っつと、セシルさんも納得してくれたようだ。ふと、時計を見る。もう少しで、スザクが外に出てくるはずだ。僕らの証言が聞き届けられることになり、今日釈放されるのだ。

「それじゃあ、スザクを迎えに行ってきます。」

そう言っつて、僕は裁判所に向かった。

裁判所から出てきたスザクと歩きながら話してっいて、ゼロとの会話を聞き、僕は愕然とし、そして、笑った。よくもまあ、敵のど真ん中でそんなことが言えたものだ。ゼロもさぞビックリしたことだろっう。

「ライ、そんなに、笑わないでくれないか？あの時は、僕もフラス・トレーションがたまっつててさ……。」

苦笑いをしながら、そんなこと言っつてくるスザクに謝りつつ。無事に裁判が終わっつてよかったと喜びながら言っつと、スザクも礼を言っつてくる。

「君、僕なんかのために無茶をしたらしいね。」

「僕なんかつて……。そうっいう言い方はよくないと思っつぞ。」

「あ、そうだね。ごめん。」

「それに、お礼を言われる筋合いなんてない。僕は一個人の感情で動いてしまっつたからな。軍人失格さ。それに、おいしいところは、

ゼロに持っていかれたからね。」

「それでも、ありがとう。」

僕は自嘲気味に言ったのだが、それにも素直に礼を言ってくるスザク。ああ、本当にいい奴だね。君は。

「ああ、どういたしまして。」

二人とも、どちらともなく笑っていた。なにがおかしいのかもわからないが、こんなに心から笑えたのは久しぶりのような気がした。今回の事件でいやなこともあったけど、それでも、こんなに笑えたのだから、いいのではないだろうか。

そして、笑う門には福来るとはよく言ったものだが・・・。

「どいてくださーい！」

空から女の子が降ってきて、それをスザクがキャッチした。

何だ？この状況は？というか、あなたが何でここにいるんですか？ユーフェミア様！

「ごめんなさい。下に人がいるとは思わなくて・・・。」

相変わらずですね。キャッチしていなかったら、たぶん、大怪我してますよ？

「僕も、上から女の子の人が落ちてくるとは思いませんでしたから。」
スザクも天然で返している。真面目に答えるところではないと思うぞ？

「あの、ユフィ。なんでここにいるの？」

僕は一番の疑問を解消するために、ユーフェミア様に聞いてみる。しかし、その言葉に反応したのはスザクだった。

「ん？知り合いなのかい？」

「ああ、幼馴染というか、古馴染というか・・・。」

「あら、ライ。久しぶりね。」

「こちらこそ、お久しぶりです。って、気づいてて飛び降りたんじやないの？」

「全然。」

何だろう、本当に懐かしすぎて涙が出てくる。ところで、さっき

の質問だ。まだ、学生のはずのユフィが何でいるんだろう。

「ところで、さっきの質問だけど・・・。」

「そんなことより、私、悪い人に追われてるの、一緒に逃げてくれませんか？」

そんな、まぶしい笑顔で言わないでください。断れないから。

STAGE 4：契約 part 3

公園近くまで来て、ユフィはスザクに話しかける。

「自己紹介がまだでしたね。私はユフィ。ライの幼馴染です。」

ユフィは僕と同じで、身分を隠したいらしい。スザクを見極めにも来たのだろうか？それとも興味本位か？

「僕は・・・」

スザクがサングラスを取ろうとするのを止めて、自らスザク自身のことを話すユフィ。

「だめよ。貴方は有名人なんだから。枢木玄武首相の息子さん。枢木スザク一等兵。」

スザクは急に冷めた態度になる。そして、僕に視線を向ける。

「すまない。僕もそれは知ってるよ。君が日本最後の首相、枢木玄武の息子だってことはね。」

スザクはため息をついて、ユフィの方を向くが、そこにユフィの姿はない。彼女は猫と戯れていた。僕はフォローを入れておく。

「まあ、彼女は、なんと言うか自由な人だから、その、あんまり気にしない方がいいと思うんだ。」

「そうなのかい？でも、いい人そうだね。彼女。」

まあ、ユフィをみて、何か企んでいるようには思わないだろう。実際何も企んでないし。

「猫好きな人に、悪い人はいないよ。」

スザクの言葉に僕は納得する。ああ、そういうことが、それには全面的に賛成しよう。

僕らはユフィに近づく、それに気づいたユフィは猫を抱きかかえてこちらに近づいてくる。

そして、スザクが猫に指を近づけた瞬間。

「うっ」

スザクは猫にかまれていた。痛そうだ。

猫はけがをしていたので、その手当ても兼ねて、段差に座り、しばらく会話をしていたが。猫がどこかへ行ってしまったのを切っ掛けに、スザクが問いただす。

「なぜ？あんな嘘を？」

確かに、『案内してください』で済みそうだな。

「私のこと気になりますか？」

ユフィ、それ答えになってないよ。確かに、気にならなければ、質問はしないけどさ。

ユフィは無邪気にスザクと僕の手を引っ張る。そして、断れなくなるような、まぶしい笑顔でこう言った。

「それじゃあ、もうちょっと私に付き合ってくださいな。もちろんライもね。」

僕とスザクは甘いのだろうか。それに何も言わずに付き合うことにする。

まあ、そのおかげで、必要な情報は手に入れることができた。

ユフィは学生をやめてしまったらしい。言葉には出さなかったが、おそらくは副総督として、姉のコーネリア殿下を助けることにしたのだろう。

だから、今日はエリアー1がどんな所なのか見極めに来たところ、自由に行動できなくて、脱走したのだ。まあ、言い方は悪いけど、そんなところだろう。

で、偶然にも僕らに出会ったと……。こんなことが知れたら、コーネリア殿下に怒られそうだな。主に僕が……。まあ、ユフィとスザクは楽しんでるようだから、それくらいは我慢しよう。

しばらくして、ほぼ租界を見て回ったところ、ユフィは危険なお願いをしてきた。

「スザクさん。ライ。もう一か所だけ案内してくれないでしょうか？」

スザクはふざけて、何なりとお申し付け下さいとか言ってるけど、

ユフィはおそらくこれが一番見たかったものなのだろう。その言葉は真剣だ。

「では、新宿に、私に新宿を見せて下さい。」

スザクは驚いていたが、僕は予想の範疇だった。だから、僕は真剣な顔で、こう切り返す。

「あそこは、危険な場所です。そこに踏み込む覚悟があるのなら、お願いではなく、命じて下さい。我々に護衛せよと。」

今度はユフィが驚く番だった。しかし、彼女はこれからそういう立場になるのだ。それ相応の覚悟がなければ務まらないと知っていた。ただかなくてはならない。そう、部下を危険にさらす覚悟を……。

ユフィは深呼吸をして、こう告げた。その顔に迷いはなかった。

「では、ライ、スザクに命じます。私を護衛しながら、新宿ゲットーを案内して下さい。」

「イエス、ユア・ハynes。」

僕につられて、スザクもそれに倣う。あとで、真相を話しておかなくちな。僕の身分も含めて……。

STAGE 4：契約 part 4

「ルルーシュくん。ちょっといいかしら？」

学園のベンチにて、スザクがどうなったのかネットで調べていると。カレンに話かけられた。疑念は払っておいたはずだが……。

「なんだい？」

「この前の電話のことなんだけど、ほら、バスルームの。」

「ああ。それで？」

やはり疑念は取り払われていないのか？それでも、冷静に眉毛一つ動かさずに、俺は対応する。

「着信履歴とわかるかな？連絡を取りたいんだけど……。」
俺はほつとする。ただ連絡が取りたいだけのようだ。

「いや、学校のだから、ちょっと、わからないな。」

そう言っ、ふと顔をあげると、彼の後ろの方にみだりの髪の女が俺の服を着て、くるくる回っていた。

「ごめん。それについては調べておくよ。」

パソコンを持って、俺はC・C・に近づく。

「すいません。見学者の方ですか？」

「は？お前は何を言っ……。」

「そうですか。じゃあ、事務室に行きましょう。入校書にサインをお願いしたいんで……。」

俺はそう言いながら、C・C・を人気のないところへとひっぱって行く。

そうして、落ち着ける場所に来ると、C・C・が先に話しかけてきた。それも妙に色っぽくだ。

「こんなところに連れてきて、何をするつもりだ？」

「忠告をしたいだけだよ。他意はない。」

俺は静かに告げる。

「昨日は言い忘れたが、この学校には、軍関係者も在籍している。」

今日は来ていないからいいが、今後は注意した方がいい。」

「ほう、私の心配か。優しいのだな。」

「いや、優しくないよ。俺は君の行動をとがめるつもりはない、君がどうなるうと、知ったこっちゃない。君は不死身みたいだし。ただ、友達流に言えば、・・・寝覚めが悪いから。それだけだ。」

俺は言葉に感情を込めないようにしながら、忠告を終わる。これは事実だ。一応、恩人ではあるのだから、俺に非がなくても、簡単につかまられるのはいやだ。

「そうか、やはり、優しい奴だな。おまえ。」

「そうだな。そういうキャラで通してるつもりだよ。・・・それから、今度、君用の制服が届くことになっている。今度出歩くときは制服を着て行ってくれ。」

しばしの無言。C・Cは何か言いたげに、俺の顔を見ている。

まあ、女子高生の制服を取り寄せるなんて普通の男ならしないからな。

「・・・その格好だと、浮いてるからな。」

そう言っ、俺はその場を後にした。

STAGE 4：契約 part 5（前書き）

内ゲバとは、内ゲバルトの略で、組織内部での暴力を伴う対立・抗争です。

STAGE 4：契約 part 5

新宿ゲットーに着くと、その惨状を改めて確認することになった。あちらこちらに墓標がたてられ、半ば集合墓地になっってしまったている。僕は、半身が焼かれるような感覚に襲われる。半分は日本人だからだろう。

やはり、毒ガスを奪還するためとはいえ、クロヴィス皇子はやり過ぎたのだ。僕が言えた義理ではないかもしれないが・・・。

「新宿ゲットーはもう、お終いです。やっと人が戻り始めていたんですが。」

スザクは僕の言いたいことを淡々と語ってくれた。それは、同時に耳の痛い話でもあった。

沈黙が流れる。誰も口を開こうとはしなかった。いや、開くことはできなかった。

その沈黙を破ったのは、興味本位で戦闘の爪痕を撮影していた、ブリタニアの学生たちの声だった。制服から察するに、アッシュフォード学園の生徒だ。

まったく、同じ学園にあんなやつらいるなんて信じられないな。ここで、たくさん人間が死んだことを理解していないのだろうか。

いや、彼らにとって、日本人は家畜同然だったな。・・・虫唾が走る。

「出て行けよ！ブリタニアの豚ども！」

その学生たちにいちやもんをつける三人の日本人が現れたことで、事態は一変する。正直、あいつらがどうなろうと、知ったことではないが、これもお仕事だ。僕が走ろうとすると、スザクがそれを制して、一人で止めに入る。

「やめて下さい。暴力は！」

スザクが駆けつけ、声をかけるが日本人の一人が手ではねのける。スザクは避けたが、サングラスにかすり、落ちる。

「お前、枢木スザク……」

その言葉で、どよめきが走る。そして、そのどよめきを、最初に突っかかっていった日本人が嫌みたっぷりにさえぎる。

「こいつは奴隷だよ。なにが、名誉ブリタニア人だよ。嬉しそうにしゃがって、仲間もプライドも捨てて、それでも日本人か！」

この日本人の言う通り、大多数のブリタニア人は、奴隷という認識なのだろう。少なくとも僕は違うと思うが……。

「……確かにその通りだ。でも！」

「何が『でも』だ！ブリタニアの犬があああああ」

スザクの言葉に反応して日本人の男が飛びかかるが、スザクはそれをきれいに投げてしまう。まあ、軍人相手に素人じゃ勝てるわけがない。

男は立ち上がると、二言三言、言葉を浴びせかけるが、仲間の一人に言われて、捨て台詞とともに去っていった。

「スザク、大丈夫ですか？」

ユフィが簡単に言葉をかけたのに対し、僕は発言することができなかった。僕は、自分自身を信じられなかったのだ。僕自身、スザクを奴隷であるかのような目で見ていないと言い切れないのだ。

「大丈夫じゃないよ。僕のカメラが……。どうして殺らなかったんだよ！名誉のくせして！だれに養ってもらってるのか、わかって……。」

学生の言葉に、僕より先にユフィが反応する。彼女は学生をビンタしていた。

「この方を侮辱することは私が許しません。」

「なんだと？この……」

「はい、ストップ。」

ユフィに危険が及ぶといけないので、迷いはいったん忘れて、止めに入る。

「なんだよ。あんた……。」

「こんにちは。生徒会の会計係兼風紀係、ライ・ストレイドです。」

僕は邪悪な笑顔で彼らに話かける。彼らはおびえていた。まあ、学園に所属しておくのもやつぱり悪くないな。

「君たちの所属を教えていただけますか？予算を編成し直しますの
で。」

「なんでだよ。俺たちがなにし・・・。」

「まあ、先に手を出したのは僕の友人です。それは謝りましょう。
すみません。ですが、あなたたちは、守られておきながら、僕の友
人を侮辱しました。それだけで理由は十分だと思えますか？」

「公爵の息子だからって・・・。」

「別に、その権威を振りかざすつもりはありません。すぎるつもり
もありません。ですから、知っているとは思いますが、僕は職業軍
人をやっています。といったところで、聞いてみましょう。あなた
は、一体、誰に、養ってもらってるんですか？」

僕は学費から何やら自分で捻出している身だ。それに比べて、こ
いつらは親に捻出してもらっているはずだ。そのカメラだって、自
分で買ったものではあるまい。

まあ、だからこそ大事にするのかもしれないが、そこはあえて無
視しよう。

学生は何かを言いたげにしているが、なにも口に出すことができ
ない。

「まあ、謝っていただければ、この場合は、目をつむりましょう。」

「わかりました。ごめんなさい。」「すみませんでした。」

「はい、いいでしょう。では、二度とこういうことをしないでくだ
さい？」

それを聞いて、学生二人はそそくさと退散していった。うまく、
煙にまけたようだ。

「すごいですね。完全に言い負かしていましたよ。」

とユフィが言えば、

「ライ、ありがとう。君には助けられてばかりだ。」

スザクもお礼を言うてくる。僕は申し訳ない気分になる。だから、

僕は自嘲してこう告げる。

「違うよ。僕はユフィが危険になるかもしれないから動いたんだ。すぐに、あいつらを追い払うこともできたのにだ。だから、お礼なんて言われる立場じゃないし、すぐに言い返すことができたユフィの方がよっぽどすごいよ。」

「それでも、僕を友人と言ってくれたじゃないか。」

「そうです。それと、貴方は自分に自信が持てなくなる時がありませんけど、全部杞憂です。もっと自信をもって下さい。」

即座にスザクとユフィに言われて、やっぱり僕はお礼なんかを言われる立場なんかじゃないと思った。僕の方がお礼を言わなきゃいけないんだ。僕の方が二人に助けられたんだ。

「ありがとう。本当にありがとう。」

二人はほっとしたような顔になる。僕は相当思いつめた様子だったのだろう。まだまだ、精進が足りないな。

「ですが、ホントに心無い人たちでしたね。」

「仕方のないことだよ。ブリタニアの国是が変わらない限り、認識も変わらない。いや、国是が変わっても認識はなかなか変わらないだろうけど……。」

ユフィは思い出して、憤慨しているようだが、それは違う。彼らを責めるのも酷な話なのだ。そういう認識をするように教育が施されているのだから……。

あんなにひどいのは一部だけれど、潜在意識ではブリタニア人の誰もが思っているに違いない。

僕や、ユフィのようにそれに疑問を持ち、心からわけ隔てなく接することのできる人間の方がこの国では希少なのである。

しかし、それも少しずつではあるが転換期を迎えるだろう。僕がナイト・オブ・ラウンズになったことによって……。でも、まだ足りない。そして、変革に伴う犠牲は……。

「だから、それを完全に変えるにはブリタニアという国はあまりにも強大だと思う。」

「強ければ、正しいんだろうか？弱いことは、いけないことなんだろうか？」

僕の言葉に、スザクは悲しそうな雰囲気で話し始める。さっきまでのスザクとは明らかに違う。僕たちはその言葉に聞き入った。

「十年前のあの頃、僕には世界はあまりにも悲しく見えた。」

十年前？ブリタニアの日本侵略のときか……。確かに、戦争の惨状を目の当たりにしたのなら、子供の目にそれはひどく悲しい光景に映ったに違いない。

「飢餓、病気。汚職、腐敗。差別。戦争とテロリズム。繰り返される憎しみの連鎖。誰かがこの連鎖を断ち切らなくてはならない。」

断片的な言葉だったが、それは戦後の世界を端的に表していた。

「だが、それは理想論だ。」

僕は、自分の意見を口に出す。何事をなすにも。今の世界では少なからず犠牲を伴ってしまう。

「もちろん。そうしたもの全て無くせるとは思わないよ。だけど、大切な人を失わなくて済む。せめて、戦争のない世界に……。」

「でも、どうすれば……。」

ユフィも考え込んでいるようだ。そして、僕にもそれに対する解答はない。いや、正解自体が存在しないかもしれない。

「僕には、まだわからない。でも、目指すことをやめたら、父さんは無駄死になっちゃいます。あの戦争で父さんは、死ななければならなかった！」

古びた時計を見つめながら、スザクは苦しげに語り終えた。

確か、枢木玄武が徹底抗戦派の軍部を抑える為に、割腹自殺、つまり、切腹をしたんだっただ。実の親がそんなことになったんだ。ショックだったろう。

それに比べて、僕は恵まれているのだろう。やはり、僕の思いはエゴでしかないのだろうか？

いや、さっきも言われたじゃないか。自信をもてと、そうだ。エゴだろうと構わない。僕はこの世界を変えてやる。

「スザク・・・。」

その言葉と同時に、爆発音が鳴り響いた。煙も上がっている。ここからすぐ近くの場所のようだ。

そこに、ちょうどいいタイミングで特派のトレーラーがやってくる。なんというか、タイミングが良過ぎだ。つけてきてたのか？

「ロイドさん、セシルさん！」

スザクもびつくりしているようだ。しかし、そんなものは関係なしに、二人は矢継ぎ早に告げる。

「早く乗って！」

「純血派の内ゲバなんだよ。とつとと逃げよう。」

純血派の？コーネリア殿下が来る前に、身をきれいにしておくつもりか？コーネリア殿下が来たら、弁護してやろうと思ったのに・・・、やっぱりやめようかな。

「ああ、それと。釈放残念でした。また付き合ってもらおうよ。」

ロイドさんらしい、言い回しで、釈放を祝っている。一般人にはわかりにくいだろうけど・・・。

「待って下さい。」

スザクがそれを呼び止める。何をするつもりだろうか。まさか、ランスロットで止めるつもりか？自分を犯人だとでっちあげた人たちの抗争を？

それは、お人好しが過ぎるだろう。

「ランスロットの戦闘データを取るチャンスではないでしょうか？」

スザクは思った以上のお人好しだった。あれ？ゼロとの会話からは、もっとシビアな人間だと思ったんだけど・・・。で、そんなことはどうでもいい。

僕はスザクをあわてて止める。

「スザク、無茶だ。彼らはこの前のテロリストとは違う。いくら、ランスロットだって、何の武装もなしじゃ・・・。」

「その点は、大丈夫。MVSを装備してるから。もちろん実験済みだよ。」

ロイドさんのその言葉に、僕は意気消沈しながらも、それでも、止める。

「しかし、君が止める必要なんてないだろ？君を貶めようとしていた奴らだぞ！」

「それでも、止めなくちゃ。だって、味方同士で戦うなんて、悲し過ぎるじゃないか。」

スザクはさびしく笑う。まったく、僕などより、スザクの方がよっぽど騎士の器ではないか。

「・・・わかった。君の言う通りだよ。ロイドさん、準備をお願いします。」

「ありがとう。」

スザクは微笑みながら、ユフィに向き直る。

「ごめん、ユフィ。ここでお別れだ。僕は行かなくちゃならない。ランスロットなら止められるはずだから。」

そして、スザクはランスロットに乗り込み、すぐに発進していった。

「行かなくて、いいのですか？」

「僕には君を守る義務があるからね。スザクは君の正体を知らないけど、僕は知っている。だから、あの命令も僕に対しては有効なはずだろ。」

そう、新宿ゲッターに来る前にユフィが命じたのだ。だから、僕はそれに従わなくてはいけない。

「まあ、ここを離れるわけにはいかないが、トレーラーの近くなら安全だから・・・。」

そう言って、ユフィの方を見ると、突然ユフィは走り出す。瞬間的に、僕は腕を掴んでいた。

「どういふつもりだ？」

僕は凄みを利かせて言った。

「私の護衛をしなければならぬのなら、ついて来てくれるんですよ？」

確かに、その通りだ。しかし、この状況でいったどこへ行くつもりなんだ。まさか……。

「まさか……、危険すぎる。生身の人間が戦闘のさなかに飛び込むなんて……。」

「それでも、あなたが守ってくれるのでしょうか？それに、あなたは部下を危険にさらす覚悟が必要だと考えてるのだろうけど、私は時によっては自分自身をも危険にさらすことも必要だと思うの。これはチェスじゃないのだから。それくらいは理解していると思ったんだけど違うの？」

いつものように、こともなげに話すユフィに対して、僕は絶句していた。彼女は僕が思っている以上に、覚悟を決めていたのだ。

まったく、僕は失念していた。彼女はあのコーネリア殿下の妹なのだ。生半可な覚悟でこの地に降り立つわけがないじゃないか。

いいだろう。僕も覚悟を決めよう。ともに、世界を変革するために……。

「わかりました。では、もう一度、御拝命下さい。」

「はい。ライ・ストレイドに命じます。私を護衛し、戦場へと導きなさい。」

「イエス、ユア・ハynes。」

今度は、完全にひざまずき、命令を受諾する。これがユフィとの最初の契約だった。

STAGE 4：契約 part 6

僕とユフィは、戦いの場に急いだ。ランスロットの介入のおかげだろうか、戦闘は沈静化しつつあるようだ。

そして、コロッセオの様な場所の通路を通り抜けると、ランスロットの後ろ側に出ることができた。

「おやめなさい！」

そうユフィが言つて、僕らは飛び出したが、判断が甘かったようだ。敵は爆雷を投げ込んできたのだ。

僕はユフィを背中にかばい。強化ガラスでできた楯を構える。こんなものでもないよりましだ。

爆雷が炸裂する瞬間。スザクが僕らに気付いたのか、シールドを展開する。

よし、これなら・・・。

爆雷が炸裂する。だが、案の定、スザクが展開したシールドの陰で、そのすべては防がれた。

シールドが消えた瞬間。僕はユフィに前を譲り、その後ろにつき従う。

「双方とも、剣を納めなさい。」

そう命じながら、ユフィはさらに前へと進み。双方の中間地点で足を止める。

「わが名において、命じさせていただきます。わたくしは、ブリタニア第三皇女、ユーフェミア・リ・ブリタニアです。この場はわたくしが預かります。下がちなさい！」

うん。態度はそれでいい。ちょっとくらい偉そうなくらいでないと駄目だから。これなら、わざわざ僕が名乗るまでもないだろう。

サザーランドは釈明をしながら、次々とひざまずいていった。その光景は実に壮観だった。

「皇女殿下！」

スザクも慌てて、ランスロットから降りてくる。まあ、当然の反応だな。スザクは知らなかったのだから。なぜ、軍人なのに知らないのかと言えば、ユフィが学生をしていた為、表舞台に姿を現していなかったからだ。

まあ、さすがに純血派はその名を名乗るにふさわしく、ちゃんと覚えているようだ。

「知らぬこととは言え、失礼いたしました。」

スザクの態度は、かしこまったようになってしまっている。これが嫌だったから、ユフィは身分を隠していたのだろう。今、とても寂しそうな顔をしているし。僕も、同じ気持ちだしね。

なので、案内のとき、僕も彼女の身分は隠していた。アンフェアなのでヒントは出してたけど……。

「スザク。貴方が父を失ったように、私も兄、クロヴィスとそしてもう二人、このエリアで失いました。」

ルルーシュとナナリーのことだろう。さて、新たな問題だ。この二人が生きていることを僕とスザクは伝えるべきだろうか。まあ、生きているんだから、いずれはばれてしまうだろうけど……。

ユフィはスザクへと向き直り、こうお願いした。

「これ以上、みんなが大切な人を失わなくて済むように、力を貸していただけますか？」

「は。もったいなきお言葉。」

スザクは、そう言って、ひざまずく。確かに正しい反応だよ。けど正解ではない。

これは、命令ではなくお願いだ。つまり、ユフィは君と対等な立場でありたいと願っている。だから、ひざまずくことなんてない。純血派の前で、皇女殿下と握手しろ。なんていうのも酷なので、そこまでは要求しないけど……。

僕がラウンスだと知ったらどうするだろう？

そして、その場はおさまり、僕らは撤収した。

帰りのトレーラーの中で僕がラウンズだと分かった、スザクは予想通り、かしこまってしまった。

「いいよ。スザク。僕らは友人なんだから。」

「それでも、弁えるべき、分というものがあります。」

真面目な上に頑固なスザクは、この考えを曲げないだろう。それじゃあ、折角の人生を損してしまう。

しょうがなく僕は、命令という形をとることにした。本当は命令じゃなく、お願いで何とかしたいが。さっきの様子じゃそれも無理だろう。

「それじゃあ、これは命令。公の場でどうしても無理な時はいいけれども、私的な空間であれば僕とユフィとは友人として接すること、いいね？」

「いや、しかし。」

「命令。」

「イエス……。わかったよ。ライ。」

それでも譲らないスザクに、さらに強固に命令を突き付けて、僕は納得させた。スザクのことを言える立場じゃないな。

「だそうだよ。ユフィ。」

僕が呼びかけるとユフィが現れ、スザクは目を白黒させている。

そして、僕の方を向いて、こんなことを言ってきた。

「君って、結構ひどいね。」

「気づいたか？でも、さっきだって、結構ひどいことしてたと思うぞ。学生にさ。」

「でも、あれはスザクと私を助けるためでしょう？」

ユフィに面と向かって言われて、僕は目をそらす。僕に全く悪意がないと信じて疑っていないのだろう。恥ずかしいからやめてくれ。

「あははは。ライも、ユフィの前じゃ形無しだね。」

「うるさい。スザク。君も見つめられてみる。同じような感覚になるから。」

「そうだね。ユフィは魅力的だしね。」

「あら。ありがとう。スザク。」

なんだ、この天然二人組は？全くもって素直すぎだ。こんなんでいい嘘ばかりではない、この世界を変革できるんだろうか？

「それより、スザク。あなた、学校は？」

「いえ、行っていませんが……。」

また、違う話になってるし……。

はあ、僕がしっかりしないと駄目か……。

そうして、先行きはとても不安なものだったが、それでも、僕たちは歩きだしたのだった。

STAGE 5：信じる心と疑う心 part 1

ゲットーでの一件から数日後、コーネリア殿下が到着されて、僕とユフィは出迎えた。緊張の一瞬だ。コーネリア殿下の姿が現れると僕は頭を下げる。

「面をあげよ。ライ。」

言われたとおりに顔をあげると、そこにはりりしい顔があった。最後に会ったときから全く変わっていないその顔に、僕はほっとした。

「お久しぶりです。コーネリア殿下。いえ、総督。」

「ああ、クロヴィスの死後、よくまとめてくれていたようだ。感謝するよ。それから、ユーフエミアのわがままに付き合わせてしまったようだ。重ねて礼を言う。」

「いえ、私も楽しんでいましたから。」

「そうか。それとユーフエミア。あまり無茶はするな。」

「申し訳ありません。お姉さま。しかし、」

「ここでは、総督と呼べ。ユーフエミア副総督。実の姉妹であればこそ、けじめが必要だ。」

「はい。わかりました。」

さすがは、コーネリア殿下といったところか、いつくしむ声の中にも威厳が漂っている。統治者としては素晴らしい人物だ。しかし、ユフィに対して過保護過ぎるのと、国是に忠実すぎるのは問題だが・・・。

殿下は、歓迎会への誘導役に話を振る。僕は、必要ないと言ったのだが、勝手に準備してしまったのだ。どうなっても知らないぞ。

「はい。政庁にて皇女殿下の歓迎の準備が整っていますので・・・。

」

それに対して、殿下は銃を向ける。ほら、言わんこっちゃない。

「抜けている。呆けている。墮落している。」

その声には、先ほどまでのいくしみや、優しさはない。

「ゼロは、どうした。帝国臣民の敵、ゼロを捕まえろ！」

厳しい声が、響き渡る。そして、ふたたび、僕に目が向けられた。非難の目だったが、僕は微笑みながらこう告げる。

「許してあげて下さい。彼らは殿下がお疲れになっっていないか心配なのです。」

「ライ。私を誰だと思っている。」

その声は低く。僕を明らかに威嚇しているような感じた。まあ、実際は僕を試しているだけなのだが・・・。

「ええ、理解しております。ですから、捜査報告の準備も整っていますよ。できれば、さっそく始めさせていただきたいのですが・・・。」

「ふふ、悪かったな。やはり、ラウンズの名は伊達ではないか・・・。よろしく頼む。」

「はい。では、ご案内します。」

僕はコーネリア殿下たちを案内して、会議場に歩く。まあ、ゼロの報告もそうだが、それよりも先にやっておかなくてはならないことが山ほどあった。

言っでは悪いが、クロヴィス殿下は政治には不向きだったのだ。

STAGE5・信じる心と疑う心 part2 (前書き)

キャラ崩壊注意。あと、若干ライ×コーネリアになってますのでご了承ください。

STAGE 5：信じる心と疑う心 part 2

「なるほど、確かに納得できるものだが、しかし、超能力の可能性は荒唐無稽に過ぎるのではないか？」

ここまでの捜査報告を終え、質問があるか聞くと。ダールトン將軍がいち早く反応した。彼は、コーネリア殿下の側近の一人であるそして、孤児たちを引き取って、育てたりもしている仁徳のある人間だ。時に苛烈な面を出すコーネリア殿下を諫められる貴重な人物で、端的に言ってしまうえば、常識人ということだ。

そう、セシルさんも言っていたが、常識的に考えれば將軍の言うとおり、こんなものは荒唐無稽な推理にすぎない。

だからこそ、僕は反論する。これは常識に考えていては解決できない事件だと捜査を通して思ったからだ。

「可能性はあると思います。状況からして、超能力があれば説明できることも非常に多い。」

それに、異を唱えたのは、コーネリア殿下の選任騎士、ギルフォード卿だ。彼も殿下に認められるだけの技量と、頭脳を持っている。まあ、人としての器と経験はまだまだ、ダールトン將軍にはかなわないが、それは僕も同じだ。つまり、彼も十分すぎるほどに、有能な人物なのである。

「オレンジの件はどうなのだ。君に見落としないと云えるのか？」

「手厳しいですね。確かに、僕に見落としないと証明することはできません。」

こうは言ったが、その反論は予想済みだ。

「それに、オレンジ疑惑について調べていくうちに、もっといろいろな問題も発見してしまいましたし……。失礼。話がそれましたね。正直に申しあげまして、先ほども言った通り、僕に見落としたりないとは言いません。僕も人間ですから。しかし、僕が調べた限りでは、ジェレミア卿は白です。」

「その根拠は？」

今度はコーネリア殿下に問われる。よし、ならばこのカードを切ればいいだろう。コーネリア殿下は情にもろい部分もある。使えば、心象を悪くされるかもしれないけれど……。

「マリアン又様を覚えていらっしやるでしょうか？」

コーネリア殿下は顔をしかめる。忘れるわけがないだろう。自分の敬愛していた人物なのだから。

僕はさらに続ける。

「あの日……マリアン又様がテロリストの襲撃を受けた日です。彼はマリアン又様の護衛、正確に言えばアリエス宮の警備をしていたそうです。尋問中、彼はこう言っていました。」

僕は、ジェレミア卿の姿を思い出しながら、その言葉を語った。

彼は拘束衣に、身を包まれながらも、決然とした態度だった。

『私は敬愛するマリアン又様を殺された。その最愛の娘であるナナリー様も大けがを負った。救えなかった。唯一、無傷であったルルーシユ様も心に深い傷を残したに違いない。そして、私は決意した。この二人だけは守ろうと……。しかし、願いもむなしく。そのふたりもまた、エリア11で命を落とされてしまった。そして、今度はクロヴィス殿下まで……。純血派を作ったのも、皇族の方々を守るためだ。ブリタニア人以外は皇族に恨みを持つ者も多いのであるが、それも、もうおしまいだ。私にはオレンジなど果物以外の何物でもない。しかし、貴官らはそうは思うまい。それに、どうであれ、私がテロリストを逃がしてしまった事実には変わりはない。どういう処断も謹んで受けようではないか。』

そこまで言って、僕は言葉を切る。だれも言葉を発しようとはしなかった。それは、ジェレミアという男に同情したからなのか、それとも、この言葉に心を打たれたのからなのか……。

その反応を確認し、僕はさらに続ける。

「途中からは涙も流していましたよ。ジェレミア卿は……。ここからは僕の意見なのですが、彼は、はた目から見れば、確かに、傲

慢な男です。信用に足るとは思えないでしょう。汚職に手を染めていてもおかしくない様に映るでしょう。しかし、その心は、決意は、騎士そのものです。ですから、僕は彼を信じます。・・・これが証拠です。」

僕はそう言いきって、着席する。そして、しばらくは沈黙を通し、誰かからの言葉を待った。こんなものは証拠でも何でもないことは解っている。でも、スザクがそうであるように、ユフィがそうであるように、僕も信じようと思ったのだ。

ジェレミア卿と、コーネリア殿下を・・・。人格者であるダールトン將軍を、同じく皇族を守る決意をしているギルフォード卿を・・・。

そして、そのコーネリア殿下が口を開く。言うまでもなく、僕を威圧している。

「その証言と、お前の言葉に偽りはないと誓えるか？」

僕はその言葉に屈せず、まっすぐ見つめ返して、返答する。

「はい。この命に代えましても。」

殿下は目を閉じて、深くため息をついた。

「わかった。私もお前を信じるとしよう。ジェレミアは白だ。ああ、もちろん、テロリストを逃がしてしまった責はとらせるがな。」

「姫さまがおっしゃるのでしたら・・・。」

「ギルフォードに同じく。」

この三人が同意となったことで、ジェレミアの話題は彼が白であることとなった。僕はため息をつく。手は汗でびっしょりだ。ここが一番の難所だったので、あとは楽なものだ。

まあ、気を抜いても駄目だけど・・・。

「しかし、超能力があるとして、それはいったいどのようなものなのだ？」

切り替えの早いギルフォード卿は早速、超能力の詳細について問いただしてくる。僕はその説明に移った。

「ここからの話はあくまでも推測にすぎません。そのことを最初に

断わっておきます。それでは、資料5ページをご覧ください。」

資料に書いたのは、次のようなことだ。

- 1．相手を一瞬で催眠状態に陥れ、その行動を操れる。
- 2．具体的に命令を告げることによって、その命令を強制的に遂行させる。

- 3．その力を行使された人間は力が働いている間とその前後の記憶を失う。

- 4．使用者は相手の目を直接見なければその力を行使できない。

- 5．メガネ程度の透過度なら直接見たことになる。

- 6．使用者は声を聞かせるだけで、力を行使できる。

- 7．一人に対して何度も使用できるのかは不明。

- 8．使用可能距離も不明。しかし、その特性上、そんなに長くはない。

- 9．能力の媒体は不明。

「かなり絞り込まれているな。推測にしてはかなり具体的だ。これらの根拠は？」

ダールトン将軍に問われて、僕はリモコンを操作し、スクリーンを展開する。そして、部屋を暗くして、映像を投影する。

そこには、ゼロが現れてからの一部始終が納められていた。

「これは、テレビ局から捜査協力の為にダビングしてもらった映像です。」

ある程度進んだところで、僕はいったん、映像を止める。そこには、ゼロの仮面の一部が開いて、目が覗いてる画像が表示されていた。

「そして、この後です。」

僕は動画を再生する。

「私たちを全力で見逃せ、そっちの男もだ。」

その言葉と同時に、ジェレミア卿はスザクを解放し、さらに、ゼロたちが逃げようとするのを、攻撃してまで止めていた。そして、映像は止まった。

明かりをつけながら、僕は説明を続ける。

「ご覧になっていただいたように、この映像と証言から具体的に推察しました。そして、これらを考えると、クロヴィス殿下殺害の状況も簡単に説明できます。ただ、ゼロがブラフを使っているとも考えられますので、これ以上の絞り込みはできませんでしたし、確定的な情報とは言えませんが・・・。」

「いや、十分だ。しかし、すまなかったな。こうして見ると、案外荒唐無稽な話でもないようだ。」

ダールトン将軍が優秀なのは、常識的でありながらこのような柔軟性も持ち合わせているからなのだろう。僕も見習いたいものだ。

「ところで、ライ。肝心の犯人についてはどうなっているのだ。」
コーネリア殿下は核心部分をついてくる。そう、超能力があるうとなかろうと、犯人を捕まえてしまえばそれでいいのだ。多少強引な論理ではあるが・・・。

僕は咳払いをして、話を開始する。出来れば話したくはない。死んでしまった人を貶めるのは良心がとがめる。しかし、この場合はしょうがないだろう。

「はい。では、超能力についてはいったん置くことにします。そうすると、犯人については、三つの可能性が成り立ちます。ですが、前提としてこの犯行はイレブンが行ったものではないと考えて下さい。イレブンがああな包囲を突破できたとは思えません。ブリタニア人が起こしたと考えるべきでしょう。類型は過激な主義者が行ったものである可能性。単純にクロヴィス殿下に恨みを持つ者の可能性。そして、クロヴィス殿下が邪魔になった者の可能性です。」

そこまで言い終えて、僕が全員の顔を見渡すと。全員が怪訝な顔をしていた。

ギルフォード卿が全員を代表して、その疑問を投げかける。

「一つ目と、二つ目は、理解できる。しかし、三つ目の邪魔になったとは一体？」

「さきほど、他にも色々が見つかったといいましたが、そのことに

ついでです。・・・単刀直入に申し上げて、このエリア11は汚職まみれ。テロが活発なもの、軍の兵器の横流しが横行しているからと言って差し支えはないでしょう。クロヴィス殿下にそれを気付かれ、邪魔になった者が暗殺した可能性が出てくるわけです。」

「君は、それを放置していたのか？君がこのエリアに来たのは確か今年の四月だったはずだが？」

ギルフォード卿のお怒りも、もつともだ。騎士たる者、当然に主君を守り、主君が間違った行動をとれば、それを正すべきなのだろう。

「お怒りはごもつともですが、僕がこのエリアに来たのはもともと専用機の開発のため、内政改革のためではありません。ですから、このこと自体に気付いたのは、今回の事件があつたからなのです。」
「しかし・・・。」

「よせ、ギルフォード。確かに、一理ある。それに、クロヴィスが死ぬなどと、考えてもいなかったのだろう？」

さらなる反論をコーネリア殿下がささげる。その言葉は確実に痛いところを突いてくる。弁護されているのか、責められているのか、解つたものではない。

「ええ。ですから、僕にも責任の一端はあります。だからこそ・・・。」

「よい。それよりも。犯人はブリタニア人か・・・。」

「ええ、まあ、超能力の件がありますので、一概に確定は出来ませんが・・・。」

コーネリア殿下はショックなのだろう。それは、そうだ。守るべき臣民に殺されるなどと、彼女は考えもしなかっただろうから。まあ、彼女が殺されるということのイメージ自体が存在していないが・・・。

「ご苦労だったな。ライ。あとはこちらで進めよう。これよりは従来の任務に戻るがよい。今宵はこれで解散とする。それと、ここで内容は絶対に公言するな。よいな。」

「イエス、ユア・ハynes。」

そして、その場は解散となった。ようやくすべてが終わり。ほつとして、背もたれに寄り掛かる僕。そこにダールトン将軍が話しかけてきた。

「見ないうちに男ぶりをあげたな。コーネリア殿下に一步も引かないでしゃべるとは、なかなかのものだ。」

僕は苦笑しながら、それに答える。

「いやいや、緊張の連続でしたよ。逃げ出せたらどんなにいいか、何度も思いましたし。」

「そうか。だが、それを感じさせない立派なしゃべりだった。今度、何かおこつてやる。それでは、また会おう。」

豪快に笑いながら、将軍は去つていった。うーん、昔からお世話になりっぱなしだから、何か恩返しをしたいところだが、それはまだまだ無理なようだ。

それにしても、何をおこつてもらおうか？ああ。その時は、グラINSTON・ナイツも呼んだ方がいいよな。まあ、全員におこるつもりで言ってるのかもしれないけど……。

そんな不毛なことを思考していると、いつの間にか会議場に残っているのは、僕とコーネリア殿下だけになっていた。

「ん？なんだ？退室しないのか？」

先に話しかけてきたのは、殿下だった。僕は先ほどよりは気楽に返答する。

「片づけが残っていますので。他の者に任せるわけにもいきませんし。」

そう、この資料を流出させてしまったら、ことは大きくこじれてしまうだろう。

「そうか、ならば私も手伝おう。」

そう言つて、立ち上がるコーネリア殿下。僕はあわてて、立ち上がり、それをやんわりと断りながらも、片づけを開始する。

「そんな、お手を煩わせるわけには……。」

「よい。それに、今は二人きりだ。昔のように振る舞え。」

殿下の言葉には威圧感など微塵もない。普通の女性が、少し偉そうにふるまう程度の感覚である。僕は困惑しながら苦言を呈する。

「よろしいんですか？ ユーフェミア様や、ギルフォード卿に示しがつかないと思いますが・・・。」

特に、ユフィに言った言葉を考えると、そういうことを言うてはいけないと思う。それに、ギルフォード卿に敵視されそうだし・・・。

ダールトン將軍が入っていないのは、彼が寛大だからだ。

「いいだろう？ 何事にも例外はある。」

「では、お聞きしますが、私的な空間ではユフィとも普通の姉妹として？」

「ふふ。わかるだろう？ 皆の前では、あのように振る舞うしかない。」

さびしそうな笑みを浮かべながら、僕に応じてくる殿下。まあ、それならばこちらで遠慮の必要はない。

「わかったよ。コーネリア。」

「ああ、それでよい・・・ライ。
いきなり、抱きつかれた。」

「コーネリア？ さすがにこれは・・・。」

「・・・だめか？」

泣き顔を向けられて、僕は黙るしかなかった。

「クロヴィスが死んで、泣きたかったのだが、みなの前では、泣くわけにはいかなかった。・・・一人になっても、泣くことはできなかった・・・。でも、ライのかおをみて、ほっとして・・・。」

僕は合点がいった。彼女はずっと我慢してきたのだ。いや、我慢せざる終えなかったというのが正しいか・・・。

しかし、光栄なことに、僕にだけは戦士として、皇女としての仮面を取ってありのままの自分をさらけ出すことができたらしい。

僕はコーネリアを抱きしめ返しながら、その頭をなでる。彼女は

くぐもった嗚咽で泣き続けた。

STAGE 5：信じる心と疑う心 part 3

夢をみた。そこでは皆が笑っていた。ルルーシュもナナリーもスザクもユフィもコーネリアも、カレンもシャーリーもリヴァルもミレイもニーナも、ジノもアーニヤも、そして、僕の妹も、日本人もブリタニア人も関係なく。皆が皆、幸せそうな顔で笑っていた。僕はこれが夢だとすぐにわかった。子供の頃のようにこんな風に笑いあうなんて、今の世界じゃできないから……。

これは、僕の願望なのだろう。だけど、それは絶望的になわな
い願いで……。だから、僕は皆に背を向ける。願いから逃げたく
て、背を向ける。現実逃避するために背を向ける。楽な道を選ぶ
ために、犠牲は出るが確実な道を選ぶために……。

でも、僕は動けなかった。誰かが、後ろから、抱きしめたから。

僕は後ろを振り向く。そこには……。

目が覚めると、そこにはコーネリア殿下の顔があった。

え？これはどういう状況だ？ここは僕の部屋だよな？ああ、調度
品がそうだから、間違いない。けど、なんでコーネリア様がここに
？え？まさか……。いや、落ち着け、クールになれ！

そして、冷静になって思い出す。昨日、あの後、眠れないという
コーネリアと僕はチェスをしていた。その内に、小腹がすいて、歓
迎用に作った料理とコーネリア用にワインをもらってきて、ここか
ら記憶があいまいだが、ワインを勧められるままに飲んでしまつて
……。

その後は覚えていない。だが、服は着ているから大丈夫のはずだ。
多分。

時計を見る。時刻は午前三時。警備の者以外は全員寝ているはず
だ。

「コーネリア。起きて。コーネリア。」

軽くコーネリアをゆするが、起きない。ちくしょう。かわいい寝顔じゃないか。

僕は、もつと見ていたい衝動に駆られるが、そういうわけにはいかない。就任早々にこんなスキャンダルめいたことが知れたら、ゼロ逮捕どころではない。

「殿下！ゼロが現れました！」

僕は、大声を出す。この部屋は防音なので大丈夫のはずだ。そして、幸いなことに、殿下はその一言で飛び起きる。

「なに！どこだ！どこに現れた！」

その声も僕以上に大声だった。その表情は、はっきり言って、怖かった。起こさなければ、よかった。

「おはようございます。殿下。」

僕は殿下を落ち着かせようと冷静に告げる。

「おはようではない。ゼロは！ゼロはどこにいる！」

「落ち着いて下さい。嘘ですから。」

「嘘？」

殿下はぼかんとしている。

「そうです。ゼロは現れていません。」

僕はまじめに切り返す。そして、次の瞬間。僕は宙を舞っていた。なんとか、受け身を取って、衝撃は和らげたが、頬はジンジンしている。はっきり言って、気絶しなかったのは奇跡に近いだろう。

「まったく、起こす程度でそのような嘘を申すな。」

「しかし、起こさないともっと大変なことになっていたと思いますよ。」

「なぜだ？」

全く理解できていないコーネリア殿下に、僕はため息をつく。さすがに、ゼロで起こしたのはやり過ぎたようだ。冷静さを欠いている。

「ここ、僕の部屋で、それ、僕のベッドなんですけど・・・。」

殿下はあたりを見回す。そして、ようやく自分の置かれた状況に

気付いたようだ。

「す、すまん。確かに、起こしてくれて良かった。」

プライベートの雰囲気に戻ったので、僕は聞いてみることにする。

「コーネリア。昨日のことは覚えてるか？」

「ああ、確か、お前とチエスをしていて、その後、料理とワインを味わって、お前は眠たかったのだろう。そのまま、寝てしまって、それで・・・、その後は覚えてないな。」

なんで、そこで赤くなるんだ。本当はなにかあったのか？そうなのか？

僕は問いたです。

なにかあったのなら、それこそ一大事だ。その、いろいろと・・・。

「はあ、復唱要求。僕が寝た後に、君は僕に何かした。」

「するわけがなかるう。わかった。白状するよ。その・・・、ライの寝顔が可愛かったから、横で見たくなくて、一緒に寝転がって見たら、私も眠くなって、それで・・・。」

それで、この顛末らしい。昨日のことは、まだいいとして、この人はブリタニアの魔女と恐れられている。コーネリア・リ・ブリタニアなのだろうか？

まあ、僕も人のことなんて言える立場ではないが・・・。

「わかったよ。じゃあ、人が来ないうちに、自分の部屋に戻って。」

「ああ、わかってる。それでは、また今度な・・・。」

そう言っ、コーネリアは自分の部屋に戻っていった。本当に、普通の女性にしか見えないよな・・・。

というか、頭が痛い。ワインを飲み過ぎたのだろうか？僕は立ち上がると、部屋が散らかっていないかを確認める。

当たり前だが、散らかってはいなかった。僕はワインの空瓶を処理し、シャワーを浴びようと備え付けの浴室へと向かう。

その時に電話が鳴った。時刻としては、ちょうど監視の報告が来る時間だ。3コール後、僕は受話器を取る。

「はい、ライ・ストレイドです。」

そして、報告が終了すると、僕は電話を切った。

今日も、学園内だけか……。まあ、買物はメイドに任せているようだし、不自由はないのだろうか……。

しかし、おかしい。あの事件以来、ルルーシュは極端に学園内部だけで生活している。授業にも毎時間出ているようだし……。

監視カメラにも彼の外に出る姿は映っていない。いや、超能力を使えば、どうしてもなるはずだ。

だが、ルルーシュが犯人という確証は得られそうにない。しかし、状況や、動機から考えて、彼が犯人であれば、きれいにロジックが組める。

まあ、今後も監視を続けるしかないだろう。そこで、僕は思い出す。今日から学園に出なくてはいけないのだ。

二日酔いっぽいから休みたいのだが、そういうわけにもいくまい。

「あー、憂鬱だ。」

そうこぼしながら、僕は浴室へと向かった。

STAGE 5：信じる心と疑う心 part 4

「おはよう！久しぶり、って、元気ないな。どうした？」

リヴァルに陽気に声をかけられて、僕がゆっくりと振り向くと、そんな言葉を投げかけられた。

「ああ、仕事が忙しくてさ・・・。」

「オレンジ事件以来、大変だったみたいだな。でも、新しい総督が来たから、少しは楽になるんだろ？」

「ああ、これedyouやく、勉強にも精を出せるよ。」

まあ、監視のためだけに来ているわけではない。授業料はきちんと払っているのだ。もとをとらないともつたいない。

「真面目だなー。それより聞いたか？今日、転入生が来るらしいぞ。」

僕は驚かなかった。知っていたのだから仕方ないのだが、リヴァルはつまらなそうだ。

「驚かないのな。」

「知ってたしな。それと、僕の知り合いだし。」

今度は、リヴァルが驚く番だった。そして、興味津々に聞いてくる。

「なになに、知り合い？じゃあ、貴族のご令嬢とか？」

「まあ、来てからのお楽しみみてことで・・・。」

まあ、転校生からすれば、お楽しみでも何でもないようなものだろう。あんなことがあった後だ。いくら、僕がいるからといって、周りのみんなはなかなか近寄っては来ないだろう。

「お、先生が来たぜ。」

リヴァルは席に着く。

そして、先生は挨拶を終えた後、転入生を招き入れる。全員がシンとなった。やはり、こうなってしまったか・・・。

彼はそれにもめげずに真面目に挨拶をする。

「本日付をもちまして、このアッシュフォード学園に入学することになりました。枢木スザクです。よろしく願います。」

「どうだい？学園の感想は？」

休み時間。周りで噂をしているクラスメートをよそに、僕はスザクに話しかける。こんな状況で感想もへったくれもあつたものではないけど……。

「いいところだね。僕にはもったいないくらいだよ。」

「卑下しすぎじゃないか？」

僕は気楽にしていると思うのだが、やはり、スザクはいづらいようだ。生徒会メンバーでさえ、近づかないとは、本当に噂とは恐ろしいものだと再認識させられる。

「ごめん。ちよつと、出てくるね。」

僕はそれに手を振って、見送る。スザクが去ると、生徒会メンバーが集まつてきた。

「すごいな、ライ。普通、話しかけられないぜ。」

リヴァルはすごく感心しているようだが、別になんのことはないことだ。僕は思わず吹きだしてしまった。

「なにがおかしいんだよ？」

ちよつと怒つたようなリヴァルに弁解しながら答える。

「いや、ごめん。だつて、知り合いだと言つたろ？」

「そうかもしれないけど……。」

「大丈夫だつて。それに君は、僕も怖いのか？僕がブリタニア人と日本人のハーフだつていうことは、知ってるだろう？」

「それとこれとは、話が別だ。」

話が別か……。育つた国は違うが、同じ人間だ。なのに、こんなに違う態度になる。リヴァルといえど、ブリタニア人の枠からは、外れないようだ。

「別じゃないんじゃないかな？私は、スザク君が悪い人には見えな
いよ。それに、誤認逮捕なんですよ？」

シャーリーの言葉に驚き、そして、感心した。ブリタニア人だろ
うと、そうでなかつた、わけ隔てなく接することができる人間が、
こんなところにもいたのだ。

認識を変革することは、意外といけるかもしれないな。信じる心
さえあれば……。

「ああ、あんなのは真つ赤な嘘。でたらめだよ。」

僕は、元気よく答えた。疲れは忘れていた。

その裏で、僕は見ないふりをしていた。ニーナはそれでもおびえ
ていたのを……。

STAGE 5：信じる心と疑う心 part 5

俺はスザクを屋上で待ちながら思考する。

スザクが学園にきた。しかも、ライと知り合いらしい。無事に釈放されたのはうれしいが、これはどういうことだ？ライと同じく、誰かの回し者か？そんなものはライだけで十分だ。

俺はライがこちらに転入してきた当初から疑いを持っていた。そもそも、彼は学校に来る必要がない。本国のアッシュフォード家からの情報で、一般人にはあまり知られていないが、その頭脳から、飛び級で医大を出ていることはわかっていいる。だから、その父のルドルフ・ストレイド公爵と共に、皇族のお抱えの医師として、安らかに一生を終えることもできるはずだ。

しかし、彼は軍に入り、そして、エリア11にやってきた。

軍に入った理由は、軍医として役に立ちたかった。でいいかもしれないが、なぜ、派遣されたのがここなのか。

そして、一番重要なのは、ライが俺を皇族だと知っている点だ。

彼は行儀見習いでアリエス宮に来ており、当時の友人の一人でもある。

それに、ライが来てから、咲世子さんから妙なことも聞いている。見張られている気配がすると。

やはり、監視なのだろうか？だとすれば、誰の命令で、一体何の為に？そもそも、監視されているとしたら、ここに隠れているのは限界なのではないか？

打開策を講じていたそんな時、俺はこの力を手に入れた。絶対遵守の王の力。ギアス。そして、この力のお陰で、とりあえずは何とかなっている。

しかし、その代償が、あの女とは……。最初は我慢していたが、傲岸不遜な態度に俺のストレスはだんだん増していつている状態だ。ギアスでおとなしくさせようとしたが、あの女には、ギアスが通

じないらしい。どうしようもない状況だ。

「ふう。」

俺はため息をつく。思考を戻そう。とにかく、ライは監視者で間違いない。ギアスを手に入れて、情報収集をした結果だ。

問題は、理由だが・・・。

後ろから足音が聞こえてきたので、いったん思考は止めて振り返る。やはり、スザクが立っていた。

「七年ぶりに使ったよ。このサイン。」

「屋根裏で話そう。」

昔、俺とスザクで決めた秘密のサイン。ちゃんと覚えていてくれたんだな・・・。

「安心したよ。君が無事で。」

スザクは、本当にほっとした様子で言うのだが、それはこっちのセリフだ。俺がどれだけ心配したのか、わかっているのだろうか？

俺は少し眉根を寄せて、そのことを聞く。

「そっちこそ俺をかばったりしなきゃ・・・。」

俺は、スザクが後ろから撃たれた光景を思い出した。あの時は、本当に死んだかと思った。「借りを返したただだよ。七年前の・・・。」

事もなげに言ってくるが、あれは、確かに、事実だけ見れば、俺が助けたと言ってもいいだろうが・・・精神的には俺とナナリーが救われたんだ。

だから、借りでも何でもないし。そんなことぐらいで、命を投げ出せるこいつに少し腹が立って、俺は顔をこわばらせる。

スザクはそんな俺を見て微笑んでいる。何を考えているのやら・・・。

「あ、あの子は？ほら、カプセルの。」

スザクはあの女の心配もしてやっているようだ。さすがに、不死身だから大丈夫。クラブハウスに転がり込んでいたとは言えず、それ相応の表情を作り、無難に返すことにする。

「ああ、戦闘のどさくさで、離れ離れになつて・・・、そっちの方が何か、分かるんじゃないか？」

その途中で、あの女が、軍に追われていることを思い出し、何か情報が漏れていないかとつさに聞いた。

これで、スザクがなぜこの学園に来たのかも分かるかもしれない。だが、スザクの返答は俺の望んでいたもののすべてを満たしてはいなかった。

「いや、親衛隊以外は、なにも知らなかったみたいで・・・。」

C・C がここにきていることには気づかれてはいない。となると、手に入れるべき情報はあと一つ。まあ、この様子じゃ、それはありえないだろうし、ライもそこまでは考えていないだろうが、念のためだ。

「ところで、ライとは、知り合いなのか？親しく、話していたようだけど・・・。」

「ああ。僕は、今、技術部にいるんだけど。その同僚。だから、君の学園での様子も聞かせてもらったよ。ちゃんと授業に出ないと、留年するよ？」

「そうだな。でも、最近はちゃんと出てるから、安心しろよ。」

「それならいいけど。あ、それと、名前。ルルーシュって呼んでもいいかな？」

俺はそれに返答しながら、思考を開始する。この分だと、スザクも監視者ということはないだろう。

しかし、分からない。なぜ、今なのだろう。スザクは名誉ブリタニア人で、クロヴィスの件があるのだから、ライ以外とは会話すらできないはずだ。

それを理解せずに、学校に行くように勧めるとすると・・・。心当たりは、一人しかない。確かに、彼女なら言い出しかねないな・・・。

その疑問を口にする、スザクは俺に予想通りに返答してきた。
「ライ以外にも捜査をきちんとやるように、取り計らってくれた人

がいてね。その人が『17歳なら学校に行くべきだ』って。」

「そうか。よかったな。」

俺は、そう言いながら、確信する。そんなことを言うのは彼女だけ……。

厄介な相手だ。彼女は時々、俺の思惑を大きく超えた行動をとるからだ。チエスで言う、無駄な一手、だからこそ、最も読みにくい。まあ、彼女の相手ではなく、その姉の相手が主だろうから、そんなに気にすることもないけれど……。

予鈴が鳴り、俺たちは、屋上を後にした。

STAGE 5：信じる心と疑う心 part 6

その日の放課後、僕は政庁でコーネリア殿下と相對していた。僕は無表情、無感情に告げる。

「総督。僕の任務は分かっていますか？それに、外部に出すということは……。」

「分かっている。お前の判断も間違っていない。しかし、名誉ブリタニア人をパイロットにするのは国是に反する。だから、特派には、出て行ってもらおう。ここでなくても、研究は進められるだろう？」

確かに、研究は進められる。しかし、大幅に遅れが出てしまうはずだ。それに、スザクを起用したくらいで出て行けとは、どうにも見が狭い。

殿下は国是に忠実だ。だからこそ、この起用は認められないという立場なのだろう。しかし、僕は異を唱える。

「では、僕がナイト・オブ・ラウンズであることも、認められないと？僕にも、に……、失礼。イレブンの血が流れていますか……。」

「お前は、ブリタニア人だ。」

殿下は淡々と断言する。しかし、僕は納得がいかず、問いたです。「その基準は？」

「ブリタニア人の血が流れていること、ブリタニア国籍であること、ブリタニアに貢献すること。以上だ。」

「殿下。お言葉ですが、名誉ブリタニア人制度を否定するおつもりですか？」

制度が設けられている以上、誰であろうとブリタニア人とみなし、実力さえあれば上に行けなくては、そんなものは形ばかりだと、テロやブリタニアへの反抗が激しくなってしまう。

ましてや、コーネリア殿下のやり方では、なおのこと、飴と鞭を使

い分けなければ、うまくはいかない。ここは、他のエリアよりも反抗勢力が多いのだから……。

殿下とて、戦争がしたくて、したくて、たまらない訳ではあるまい。戦争は手段であって、目的ではない。まあ、ナイト・オブ・テン、ブラッドリー卿は目的としている節があるが……。

「そのつもりはない。だが、名誉ブリタニア人には、名誉ブリタニア人の分というものがある。」

「そんなものはないはずです。それでは、いずれブリタニアは行き詰ります。」

「違う。そういうことではない。私は、軍に入れるのが嫌なんだよ。ブリタニアはブリタニア人で守るべきだ。同族殺しをさせるのも忍びないしな……。」

その言葉を聞いて、僕は冷静さを少しだけ捨てて、まくしたてる。「僕達が今までやってきたこと、そして、今からやろうとしていることを棚に上げて、よくそんなことが言えますね。それに、どの企業でも才能の有無に関係なく、彼らは忌避されています。だから、僕たちが門戸を開いてあげないといけないのでは？」

殿下は、純血派のように皇族を守りたいからではない。ブリタニアに反旗を翻す可能性を打算的に考慮しているだけだ。

「なぜ、信じられないんです！ いや、信じようとしませんか！？それに、この起用を駄目だというのなら、僕も信用しなくて結構です。でも、あなたはそうではないと言った。なぜです！？」

殿下はため息をつく、僕の目を見つめてきた。そして……。「お前を信じるのは、……お前が好きだから。ではだめか……？」

「……はい？」

思わず僕はキョトンとしてしまい。さっきまでの毒気を抜かれてしまった。

これは、どういうことだろう。好きということとは、好意を寄せているということだ。好意の種類にもよるが、これはどう受け取るべ

きだろうか？

「嫌か？」

昨日の行動だけを見れば、ユフィとのべたつきから、兄弟のような感覚だと思った。しかし、この状況だと、そうではない気も……。なんか、頬を赤らめているし。

だが、今話しているのはそんなことではない。

「……理由は、それでいいとしましょう。しかし、それなら、僕の人選も信用できるんじゃないですか？」

話がループし始めている。たしかに、こんなものに答えは出るはずもない。互いの意見は平行線をたどり、堂々巡りを繰り返すだけだ。

「先ほども言ったが、お前の判断は信じよう。しかし、私にも譲れないものがある。それに、ずっとそこにいるというわけでもない。

作戦にもきちんと参加させるさ。次回はランスロットがあると、ゼロが来ない可能性があるので、参加させられないが……。」

「それなら、構いませんが……。」

「わかってくれたか。用件はそれだけか？」

「ええ。時間をとっていただいてありがとうございます。では、失礼します。」

僕は最低限の言葉を言って、総督執務室を後にした。

政庁に行く前、釘をさしておいたので、大丈夫だとは思ったが、念のために、スザクのロッカーの前に行ってみると、スプレーを手にしたその学生が、スザクの体操服に誹謗・中傷の言葉を書いていた。僕は、激怒し、その二人を問い詰めていると、運悪くスザクがやってきてしまった。スザクは僕を止めて、二人はそのすきにどこかへ逃げてしまった。

「何故だ？君は今、怒っていいんだ！」

「でも、仕方のないことじゃないかな。」

「仕方ないだろう。それに、あいつらだって、また来てしまう

ぞ。」

「大丈夫だよ。ごめんね。気を遣わせて。」

スザクはそう謝って、服を洗うために去っていった。謝る必要なんてどこにもないのに……。

こちらも黙っているわけにはいかずに、その後でミレイさんに相談したのだが……。

「うーん。まあ、何とかしたいけど……。逆にひどくなってしまうかもしれないしねえ……。」

「現状、打つ手なしだと……。」

「そういうことね。とりあえずは様子を見ましょ。」

と軽く言われてしまい……。何にも手が出せない自分に苛立っていたところに、今回の特派追い出しと、次回の作戦の内容が発表された。

作戦内容は、ゼロをおびき出すための、サイタマ・ゲットー壊滅戦。つまりは虐殺だ。

ゼロを捕まえるだけでなく、これはやり過ぎで、しかも、ゼロが出てくるとは限らない。それに、あの学生たちを勢いづかせるかもしれない。反抗も勢いを増すかもしれない。すなわち、あらゆる面でマイナスだ。

だから、特派の件も含めて、抗議に行ったのだが、なにもできなかった。

STAGE 5：信じる心と疑う心 part 7

夜になって特派に戻り、そのことを話すと、ロイドさんはがっくりきたようだ。

「はあ、デヴァイサーも機体も最高のものを用意できた。なのに、設備が劣化するんじゃないかね……。」

「大丈夫ですよ。それなりにいいところは見つけてありますから。」
「そう言いながら、場所の地図を渡してきた。」

「しかしね。セシル君。そんなに、明るくはなれないよ。だいたい、外部に漏れないように、研究をするのは思っているよりずっと、大変だと思うよ？」

「えっと、それは……。」

明るく喋っていたセシルさんに現実の話をぶつけるロイドさん。

セシルさんには悪いが僕もロイドさんの言う通りだと思う。

「ロイドさんの言う通りですよ。新兵器開発なんて、テロリストが食いつく可能性が高い。そのことを理解してないんでしょうかね。」

総督は。」

「全くだよ。せっかく開発したランスロットを盗まれちゃあ、一生立ち直れないよ。まあ、スザク君と君以外では動かせないだろうけどね。ふふふふ……。」

不気味な笑い声をあげながら、ロイドさんも僕の意見に、話の方向は少し違うが、同調してくれた。

「まあ、命令ですから、従わないわけにはいきませんからね。引越し先ではななきゃいいけど……。」

「でも、大丈夫ですよ。あれだけ堂々とランスロットを運んでいても、ばれなかったじゃないですか。」

ゲッターでの一件を言っているのだろう。セシルさんの言っていることも一理あるが、そういうことではない。

「だって、スザクと僕が出入りすることになるんですよ？ 気をつけ

はしますが、つけられる可能性だって……。セシルさん？この場所って……。」

「ええ、アッシュフォード学園の向かいの大学よ。」

「セシルさん。笑顔で言ってる場合じゃないですよ。さっきの話聞いてました？」

僕は、セシルさんをじと目で見る。

「逆に、分からないと思うんですけど……。」

「ばれるときは、ばれますよ？」

「そうだけだね。ここでいいんじゃないかな？」

「ロイドさんまで！」

「だって、ここなら、狭いけど、まだ設備はいい方だと思うよ？それに、学園周辺の警備はかなり厳重だからね。」

その通りだが、抜け道があるから怖い。たとえば、地下の水道設備などだ。

「まあ、いいんじゃない？責任は総督に取ってもらえば……。」

「多分。責任とらされるの僕ですよ。」

だからこそ、慎重にならなければならない。それに、ゼロであるかもしれない、ルルーシュがいる学園のすぐそばに置くのは、どうも気が引けてしまう。

「大丈夫だよ。」

スザクがやってきていた。僕は少しだけ目をそらして、問いかける。

「理由は？」

「テロリストに襲われても僕らがいるからね。すぐに駆けつけられるじゃないか。」

「まあ、それはそうだが……。」

「大丈夫だよ。それに、学園の近くなんだろ？」

地図を取りながら、再度疑問を投げかけてくる。

「……なるほどな。」

そうだ。発想を変えれば、ルルーシュがいるなら、現段階で、学

園付近が襲撃される確率は低い。まあ、彼がゼロだった場合だが、東京のテログループと連絡を取っているのは明らかだろうから・・・その場合。ここは一番の安全地帯となるだろう。

僕はいかにも参りましたという感じで手を挙げる。

「はあ、わかりました。賛成多数で、その場所に決定ということで。」

「じゃあ、その旨を連絡してきますね。」

「僕らは、機器のまとめ作業に入るよ。」

セシルさんがかけていくと、僕らは僕らで、引越しのための準備を始めた。

引越しの準備が終了し、政庁の休憩ブースで僕はスザクと話すことにした。

「どうだった。ナナリーとは久しぶりに会ったんだろ？」

スザクは懐かしそうに、そして、楽しげな顔でしゃべりだした。

「うん。無事で何よりだったよ。それに、変わって無かったな。もちろん体つきは違ってたけどね。」

そして、スザクが食事のことなどを話し終えた後、僕もそれに柔和な笑顔で答える。

「そうか。それは良かった。」

これは、素直にそう思った。ルルーシュがゼロであったとしても、彼女には何の落ち度もないのだから・・・。

「それで、本当なのかい？」

スザクは真剣な表情になる。嘘だと言ったら、殴られてしまうかもしれない・・・。確証は得られてはいないけど・・・。

「ああ。ルルーシュがゼロである可能性は高い。」

「まだ、信じられないよ。ルルーシュも昔のままに見えた。」

「だからこそだよ。新宿ゲッターでの件、君を救いだした件。そして・・・。」

「動機・・・。」

スザクは悲しそうな顔になる。複雑な感情になるのも確かだ。理解できる。すべては、状況証拠のみに頼った推理。不確定要素も多い。ルルーシュを疑うのは、スザクにとって、苦痛だろう。

「すまない、スザク。ゼロが、ルルーシュで、日本解放を建前として、ブリタニアへの復讐を成そうとしている可能性がある以上、僕は疑ってかかって、そして、そうだとしたら、止めなくちゃならない。」

ルルーシュや、日本人は前大戦で日本が負けたのは、枢木玄武首相の自殺とブリタニア軍のナイトメアフレームの存在が大きいと考えているが、これは大きな間違いだ。

当時のブリタニア軍で、ナイトメアフレームは試験的に投入されたものであり、その割合は軍全体の一割にも満たない。作戦のほとんどは、圧倒的な物量による作戦だった。

日本はブリタニアに単純な物量差で負けたというのが、僕の見解だ。

そして、それは今も変わらない。いくら、武力を整えて、ブリタニア軍エリア１方面軍に拮抗したとしても、増援部隊が来てしまえば、それこそ本隊が来たら終わりだ。

そうなれば、日本は今度こそ奴隷としての道を歩むことになってしまう。変革など出来るはずもない。

ルルーシュが日本を本当に解放してくれるなら、別にかまわないのだが……。もちろん、ルルーシュがゼロであった場合の話だ。

「わかってる。それで、僕はこれからどう振る舞えばいいんだい？」

「そうだな……。つらいだろうけど、しばらくは、疑うそぶりは見せずに、普通に学校に通ってほしい。確証はないからね……。」

僕は心苦しかったが、そうお願いした。

「わかったよ。大丈夫。気にしちゃダメだ。この世界を変革したいんだらう？」

スザクは僕の心を察してくれたのか、そんな言葉を投げかけてくる。僕は感謝の言葉を返す。

「ありがとう。明日も早いし、戻ろうか？」

「そうだね。おやすみ。」

「おやすみ。」

そう言つて、僕らはそれぞれの寝室に戻つていった。

僕は、戻りながら、証拠について考えた。そう、もうすぐに得られるはずだ。不本意だが、コーネリア殿下の作戦によって・・・。

STAGE5：信じる心と疑う心 part 7（後書き）

STAGE5 終了回です。本当は猫に仮面を奪われた騒動も入れたかったのですが、それは番外編として描くことにします。

それにしても、だんだん長くなってきました。これでも削ってる方なのですが・・・。

では、次回をお待ち下さい。

STAGE 6：はずされたチェック part 1（前書き）

一応解説すると、チェスの用語で、チェックは王手、チェックメイトは詰み、リザインは投了・降参の意味です。

STAGE 6：はずされたチェック part 1

テレビで報道されていたとおり、コーネリアはゲッターを取り囲み、最初にゲッターの普通の住民たちを処理しながら、じわじわとゲリラをあぶり出そうとしている。

挑発に乗った俺は、そんな光景を見ながら、待っていた。

それにしてもひどい光景だった。そして、同じだ。クロヴィスがコーネリアになってもブリタニアは変わらない。

「どこの所属だ？部隊名とIDを示せ。」

後ろの壁を登ってきたサザーランドから声がかかる。丁度いいタイミングだ。俺は、慎重に振り返り、偽りの部隊名と名前を告げ、テロリストからの押収物と称して、中身は何も入っていないディスクを示す。

すると、案の定、パイロットはIDを確認するためにコクピットから出てきた。俺はそのタイミングを逃さずに、ギアスを行使する。「わかりました。しかし、こちらもその前に、あなたのサザーランドを頂きたいのですが？」

俺のギアスは絶対遵守の力。誰も逆らうことはできない。そうやって、サザーランドを奪い。新宿ゲッターの時と同じに、コーネリアを討ち取る為に行動を開始する。

この前のイレギュラーは確認できなかった。あれさえいなければ、俺の戦術で十分対応できるはずだ。

「そう、勝つのは俺だ。コーネリア・リ・ブリタニア！」

味方が撃破され始めた。そして、敵は新宿ゲッターと同じく、こちらのサザーランドを鹵獲して、使用しているらしい。

ライからの報告はあったが、私はあえて、ダールトンとギルフォードと捜査会議にいた部下以外に超能力のことについては、話していない。ゼロが同じ作戦をとるように仕向けるためだ。

そして、ゼロかは分からないが、同じ戦術をとってきた者がいる。本物か、偽物か……。

私は、見極めるために、もうしばらく、成り行きを見守ることにした。

その後も、敵は味方部隊を次々に、鮮やかに撃破していった。調子づいているようだ。

まあ、クロヴィスの件、そして、あのイレブンの奪還の件、この二つを成功させて、調子づくのも分からないでもないが、今度の相手は、私だぞ？ゼロ。

数分後、補給ルートである橋が落とされたところで、私は全軍にゲットー外縁まで後退を指示した。

さあ、食いついてくるがいい。ゼロよ！

ことは、俺の指示通りに進んだ。やはり、コーネリアは武人であって、指示を出すだけでなら、俺の方に分があるようだ。

そして、橋を落としたところで、敵は後退を開始する。

「まったく、張り合いがない。後退する舞台に紛れ込めば、コーネリア。お前のすぐ近くだ。条件は早くもクリアか……。」

俺は、何の疑いもなく、後退する舞台にまぎれて、コーネリアの本陣に近づいた。

全軍が後退しきつたのを、確認して、私はギルフォードら、親衛隊を前線に投入した。すると、急に味方の識別信号を出した機体が市街に現れる。

しかし、そんなものは味方ではない。我が軍に命令を聞けないものなど存在しない。命令を実行できないものなど存在しない。

これは、絶対の信頼。だから、揺るがない。我が軍の結束は。

「破壊しろ。」

私は命じる。反論は出たが、それもねじ伏せる。

「私の部下なら、命に代えても、命令を実行するのは当然だ。」

識別信号を出させたサザーランドが撃破された。識別信号を無視するというのは・・・俺は、素早く指示を飛ばす。

しかし、それはコーネリアに読まれ、失敗する。だが、読み返した分。被害は出ていない！

俺は、次の指示を出そうとするが、応答がない。そして、親衛隊と分かるや、ゲリラの連中は次々に、降伏しようとして、殺されていった。

残された者も、こちらの命令を無視して、戦闘を行い。そして、撃破された。結果として、俺は敗北した。

俺個人の能力が劣っていたこともあるかもしれないが、それ以上に、組織力の差で俺は敗北してしまった。

「ゲームにすらなっていないぞ！」

戦闘終了を告げるアナウンスを聞きながら、俺は敗北感に打ちひしがれた。しかし、そんな場合ではない。ここは敵のど真ん中だ。

あとは、この中にサザーランドの正規パイロットでない人間がいれば、そいつを捕えて終了だ。

以外にも、あっさりと終わってしまい、拍子抜けして、私はひとりごちる。

「新宿のようにはいかなかったな。ゼロ。いや、真似をした奴か？」

その間にも、サザーランドの確認は続く。そして、なかなか出てこないパイロットにぶち当たった。

ギルフォードと親衛隊にはグロースターから出ないように指示してある。ライの報告通り、直接目を見なければならぬなら、超能力は封じられたはずだ。

他のパイロットに使ったとしても、この状況でどうなるものでもない。そして、強行突破もできない。

チェスで言う、チェックメイトだ。

さあ、リザインをコールしろ。

そして、ハッチを開こうとしたその瞬間。

「ゼロだ！ゼロを発見！！」

ほう、自分は高みの見物をしていたということか、そして、敗北はしたものの、自分が存在することだけは本陣に現れてまで、アピルするとは……。

私の予想通り。まったく、楽しませてくれる！！

ゼロと思しき人物に、コーネリアはただちに射撃を加えるが、ゼロは落下。俺はそれに乗じてその場を脱出した。

STAGE 6：はずされたチェック part 2

僕とスザクとカレンとシャーリーは生徒会室にて、猫祭りのための道具の確認をしていた。

この前、ひと騒動を起こしてくれた猫。アーサーの歓迎会を兼ねた、ミレイ会長発案の気まぐれイベントだ。

正直、会計作業が大変だったが、アーサーの起こしてくれた騒動で、スザクは学校に溶け込むことができたのだから、そんなに嫌な気はしなかった。

まあ、ささやかな、感謝といったところだろう。

作業が一通り終わったので、僕は雑談をしていた。和やかな雰囲気だったが、僕の不用意な一言で、事態は思わぬ方向へと向かうことになった。

「ところで、ナナリーにキスされたとき、どんなだった？」

「どんなんて・・・。」

スザクは困惑しながら、僕の方に顔を向ける。僕は、それに笑顔で答えてやった。たまには、こうやって馬鹿話をするのも悪くないはずだ。

「いや、あるだろ？柔らかかったとか。」

「確かに、それは否定しないけどさ・・・。」

顔を真っ赤にして、そっぽを向けるスザク。おもしろい。僕はさらにからかってやることにする。

「それにしても、結構必死に追ってたけど、誰か目当ての娘でもいたのかい？」

「違うよ。ミレイさん・・・。」

「ほう、ミレイさんか。じゃあ、リヴァルと争うことに・・・。」

「だから、違うって！だいたい、君だって、必死に探してたと思うけど？」

もうちよっと、からかおうとしたが、反撃されてしまった。しか

し、甘いぞ、スザク。その言葉では僕に対しての反撃としては弱い。
「あれは、学園のレディー達の唇を守っただけだよ。ファーストキスはちゃんと好きな相手とするべきだからね。」

「君ってさ、時々、キザだよな。」

「そうだね。自覚はしてる。」

スザクに苦笑いで言われて、僕も素直に返す。そんなことは百も承知だ。だって、わざとやってるんだから。

「でも、君がアーサーを捕まえたら、権利はどうするつもりだったんだい？」

むづ、攻め込んでくるなあ、女性陣二人がいるから、ここは、慎重に答えないと。

「むづ。学園には、綺麗な人が多いから、迷うなあ。」

そう言つて、カレンとシャーリーの方を窺うと、シャーリーは何やらただならぬ雰囲気だ。

そういえば、さつきから会話に参加してこないのはなぜだろう。カレンはこういう話が嫌いなだけかもしれないが、シャーリーは好きそうなのに……。

「どうしたの、二人とも？」

スザクはお構いなしに、質問した。

度胸あるなあ。いや、敵陣でゼロにそれだけの言葉を言い放ったのだから、これくらいは当然にできるか……。

「あのだ、カレン。私たちに何か隠し事してない？ いいよ。隠さなくても……。」

「なんの話？」

カレンは若干の緊張を伴っていた。なにか本当に隠し事でもあるのだろうか。

「話してよ。私、驚かないから……。このあいだね。見ちゃったんだ……。」

場の空気はさらに緊張度を上げていた。僕とスザクも固唾をのんで次の言葉を待っていた。どうも、発言できるような空気ではない。

というか、僕らの存在、忘れてないか？

「付き合ってるんでしょ。ルルと！」

・・・はい？

僕もスザクもカレンもその一言にキョトンとなった。それくらいのことで、ってまあ、大事件だけど、そんなに重くなるような話でもない。

監視しているから分かるが、付き合ってる事実なんてないのだから。

「だって、この前校庭で・・・。」

「ただ、話しかけただけよ。」

「アーサーを捕まえようとした時だって・・・。」

「あれは違うでしょ。それに、キスくらいで・・・。」

「キスくらい・・・。じゃあ、それ以上も・・・。」

「ちよつと、変な想像ストップ！周り見えてなさすぎ！」

シャーリーは顔を青くしながら、逆にカレンは顔を赤くして、焦っているような、怒っているような感じで、受け答えをしていた。

「シャーリーって、あんな性格だったけ？」

スザクは呆然としながら、僕に聞いてくる。それに僕は、苦笑いで答えた。

「時々、特にルルーシュのことになると、変な妄想をしてしまうらしいんだ。」

「へえ、そうなんだ・・・。」

僕とスザクがそんな会話をしている内に、話は、どんどんとエスカレートしていった。

「嘘をつかないで！」

「嘘なんてついてない。私はルルーシュとつきあってないから。」

「じゃあ、歓迎会の時は？あの時、告白されそうになったんでしょ？」

「だから、違うって・・・。」

そう言いかけて、一瞬僕らの顔を見るカレン。僕らを使って、な

にかを仕掛けるのだろうか。

「いい加減にして、カレン。本当のことを言ってよ。」

「わかった。正直に話すわ。私は、ライと付き合ってるの。」

「え!?!」

シャーリーはおるか、スザクもびっくりしたように声を上げる。

そりゃそうだ。僕だって初耳だもの。

それでも、僕が動じなかったのは、ある程度読めていたからなのだが、一番大胆な方法をとってきたな。僕としては、まんざらでもないけど。

「本当なの?」

シャーリーが僕の方を向きながら、聞いてくる。顔は真剣そのものだ。僕は、カレンを咎めるような口ぶりで、話を合わせる。

「カレン。秘密だって言っただじゃないか。」

「仕方ないじゃない。本当のこと言わないと、シャーリーが納得しそうになかったし、それに、ルルーシュと変な噂がたつてもいいの?」

「まあ、いい気分じゃないな。」

カレンも少し怒ったような演技で言ってくる。それに合わせて、表情を変え、さらに合わせる。

「それに、隠すのも限界があると思うわ。だから、いつそのこと、言ってしまった方がいいと思ったのよ。少なくとも生徒会メンバーにはね。」

「確かにカレンの言う通りだ。嘘をつき続けるのはよくないね。まあ、そう言う事だから。シャーリー、納得してくれたかな?」

僕は照れた様子を見せながら、シャーリーに聞いてみる。彼女は首をぶんぶん縦に振って、謝ってきた。

「ごめん。ライ君の前で、あんなこと聞いちゃって!ライ君も気を悪くしたよね?本当にごめん!」

僕は、ほっとしながら、シャーリーに言葉をかける。

「別に、気にしてないよ。カレンだってそうだろ?」

「ええ。こつちこそ、ごめんね。隠してて。」

そう言って、カレンもいつもの感じに戻った。しかし、少し顔を赤くして、いつもより少しだけ活発に反論していた時の方が、カレンらしいと思ってしまうのは、なぜだろう？

「すまない。遅れた。用事が長引いちゃってね。」

「ルルーシュでも苦戦することがあるんだなあ。びつくりしたよ。」
噂をすれば、何とやら。そこへ、ルルーシュとリヴァルが入ってきた。

リヴァルの口ぶりからして、用事とは、賭けチェスか何かだろう。まあ、びつくりもするだろうな。リヴァルの隣にいるのが、本物のルルーシュだとしたらだが……。

「もう、また賭けチェス？」

シャーリーが冷たい視線を向けながら、ルルーシュ（便宜上そう呼ぶ）に話しかける。まあ、彼のせいで、危うく生徒会に亀裂が入るところだったし、この前、やめると言いながら、賭けチェスをしていたのだから、こんな態度をとられても仕方ない。

「いやー、どうしても、断れなくてさあ。」

「そうそう。俺は、もうやめると言ったのに、リヴァルが勝手に受けてしまったんだよ。」

リヴァルの弁解にルルーシュが補足を入れる。

「リヴァル。会長に報告するわよ。」

今度は、その冷たい視線をリヴァルに向けるシャーリー。

「ごめんつてば。だから、会長には報告しないで！！」

必死に懇願するリヴァル。しょうがない、助け船を出すとするか……。

「シャーリー、そのくらいにしておこう。その代わり、リヴァルには後の準備をやらせるってことで。」

「えー！あと、飾り付けだけじゃない。」

「いいじゃないか。多分、リヴァルだって、貴族相手じゃ断れなかったんじゃないか？」

「そうそう。ライの言う通りなんだよ。」

助け船は出したが、シャーリーはなおも不満げな顔をしていた。むう、一体どうしたものか。僕は、スザクに顔を向けるが、肩をすくめて見せるだけだった。

まあ、この状況で手を打てるのは、ルルーシュだろう。そして、実際にルルーシュが手を打った。

「そうだな。これで、最後にする意味合いも兼ねて、今回の勝ったお金で何かおごるよ。もちろん全員に。」

「えー！だって、結構な額だぜ！？」

どれくらい、儲けたのだろうか。でも、シャーリーは納得しないと思うぞ。

「賭けで儲けたお金でおごってもらっても、嬉しくなんてありません。」

当然のように、シャーリーは逆に怒ってしまった。

「じゃあ、寄付すれば？」

そこに割って入ったのは、スザクだった。どれくらいを寄付に回させるつもりなのだろう。

「あ、それいい考え！」

この考えには、シャーリーも賛同したようだ。まあ、足を洗うという意味では、こちらの方が正しい使い方だと思う。

寄付された方からすれば、結局は賭けで稼いだお金だけど……。いや、寄付される側はそんなこと考えないか。

「まあ、仕方ないな。」

「えー！？せつかく、稼いだのに？」

「なあ、リヴァル。会長に報告されるのと、寄付するのどっちが楽だ？」

「・・・寄付する方が楽です。」

最後まで、しぶっていたリヴァルだが、結局は折れる形となった。飾りつけは結局全員でやることになり、それが終わると、それぞれ帰っていった。

STAGE 6：はずされたチェック part 3

とりあえず、僕はカレンを家まで送ることになった。まあ、怪しまれないためにだ。

「ところで、カレン。あんなことを言って大丈夫なのかい？」

道すがら、僕はカレンに確認を取った。別に、僕はかまわないのだが……。

「ええ、大丈夫。それに、あの状況でスザク振っても、あわせてくれなかったと思うけどね。」

すまし顔で、カレンは言った。確かに、スザクに振ったら、まじめに返してしまって、ごまかすことなどできないだろう。

「僕が合わせないとは、考えなかったの？」

「あなた言ってたじゃない？猫探しのときに必死になってたのは、レディーの唇を守るためだって。」

ちゃんと聞いてたのか。なんか恥ずかしいな……。

「だから、レディーの名誉も守ってくれるんじゃないかって、思ったのよ。」

まるでルルーシュと付き合ったら、不名誉だといっているような言葉に、僕は苦笑しながらも、彼を弁護した。

「ルルーシュがそんなにいやか？ルックスはかなりいいと思うんだけど。」

「失礼だけど。見た目だけだと思うわ。」

カレンは、ばっさりと切り捨てた。ルルーシュは何にも感じないのだろうが、ルルーシュのファンに言ったら、きれられそうだ。

それに、ほかにいいところもたくさんある。家事とかできるし……。

僕は、一応忠告しておくことにする。

「カレン。女性陣の前では、言わないほうがいいぞ。」

「ええ。わかってる。あ、遅くなったけどありがとう。話を合わせ

てくれて。それと、あなたのほうこそ、大丈夫なの？」

「僕がかまわないよ。気にしないで。」

カレンは思い出したように、不安げな表情で僕のほうを伺ってきしたが、僕はそれに微笑みながら、返答する。

「そう、それならいいわ。」

「そうだけど、それが？」

「私もね。ハーフなの。ブリタニアと日本の……。」

ほっとした様子のカレンから、突然に大変な秘密を告げられて、僕は足を止める。

「え？」

「だから、私もハーフなのよ。……驚いた？」

確かに、驚いた。ブリタニアで、ハーフである人間はそれを隠すものだ。いらぬ争いや、差別を避けるために……。

堂々と公言している僕は、例外だ。

「なぜ、僕にそんな重要なことを？」

「フェアじゃないでしょ。助けてもらっておいて、感謝の言葉一つだなんて……。」

「だから、気にしなくてもいいって……。」

「そっちこそ、気にしないでいいわ。だって、私の勝手に言ったんだから。」

すがすがしい笑顔で言われて、僕は押し黙る。

なんというか、僕は全般的に女性に対して、最後の最後で甘くなるか、強く出れない性質なのだろう。悪いというわけではないけれど、少し改善した方がいいのかもしれない。

だから、僕も……。

「けど、やっぱり、それは対価としては……。」

そのとき、前方で人が倒れるのが目に入った。女性のような子供だろうか、三歳くらいの子が、おろおろしている。今にも泣きだしてしまいそうな感じもする。

だが、周りの人間は、ただそれを見て通るばかりだ。

僕は、カレンを置いて、走り出す。

「大丈夫。ちよつと、待っててね。」

僕は子供の頭をなでると、女性を仰向けにして、意識を確認する。数回に分けて肩を叩き、段々と大きな声をかける。反応はなし。

続いて、呼吸確認。気道を確認し、胸の動き見ながら息を直接感じるために、自分の頬を女性の顔に近づける。呼吸もしていない。

さらに、脈も確認する。脈拍なし、つまり、心臓は拍動していない。「ちよつと、いきなり走り出さないでよ。」

カレンが追い付いてきた。僕は、ポケットから携帯電話を取り出し、カレンに投げてよこす。

「119番だ。救急車を呼んでくれ！」

「は、はい！」

カレンはびっくりしたように、携帯を操作し始める。それを見て僕は心臓マッサージと人工呼吸を開始する。

30回の心臓マッサージの後、2回の人工呼吸。しかし、呼吸は戻らない。僕は再び、心臓マッサージに移行した。

「ありがとう。お兄ちゃん。」

「どういたしまして。それじゃあ、お大事に。」

頭を下げてくる先ほどの女性と、手を振る子供に別れを告げて、僕は病室を出た。女性は、救護措置が早かったので、大事には至らなかった。

「それじゃあ、後は頼んだよ。」

病室を出ると、担当の医師が立っていたので、僕は声をかける。

「戻ってくる気は無いのですか？」

「すまない。でも、戻れないよ。」

「そうですか。残念です。」

医師は悲しげに笑って、その場を立ち去った。僕は、出口へと向かう。受付の待合所では、カレンがベンチに座って待っていた。

てつきり帰ったと思ったが・・・。

「ごめん。つき合わせてしまつて……。」

「いいわ。それより。あなた……。」

「ストレイドの名前は有名だろ？」

「だけど……。その年で医師免許なんて……。」

「驚くのも無理はないけど、事実だよ。」

カレンの驚きようは、ハーフだと告げられた僕よりも大きいものだったのだろう。彼女は半ば、呆然としながらの会話だった。

「なんで、軍にいるの？誰でも、わけ隔てなく助けられるはずなのに……。」

「それが無理だから、限界があるから、軍にいるんだよ。」

カレンの言葉に、僕はできるだけ、笑顔になるように顔を作る。

だが、きつとどんなにうまく作れたとしても、寂しさは出てしまうだろう。

「さつきも、見ただろう？ブリタニア人はだれ一人として、彼女を救おうとはしなかった。心配して目を向ける人すらいない。おそらく、彼女が日本人というそれだけの理由でだ。」

現在のブリタニアでは、緊急救護マニュアルは高校を卒業している程度なら、誰でも知っている。そして、ストレイド家が創設した報奨金の制度もある。だから、一人も心配しないなんてことはない。「それじゃあ、だめなんだ。いくら、僕が力を揮っても、限界がある。さつきは、偶然、助けられたけど……。」

「でも、それは軍にいる理由には……。」

「僕はね。カレン。名誉ブリタニア人になれば、キチンとした仕事につけて、きちんとした生活を送れるようなそんな社会にしたいんだ。そうなれば、時間はかかるだろうけど、差別も自然と無くなるはずだから……。」

「あなたは、軍で功績を上げさせようと言うの？日本人に、同族殺しをさせることになつても！そして、他の国の幸せを奪つてでも！」

「ああ、正確には、名誉ブリタニア人全部だね。」

「エゴよ。それは！」

カレンは怒っていた。でも、それは仕方のないことだろう。確かに、こんなものはエゴだ。そして、日本人であることを捨てると言っているようなものだ。むしろ、素直に賛同してくれたスザクの方が異常なのかもしれない・・・。

だけど、そうでもしなければ、変えられない。それに、日本の文化までを捨てると言っているわけではない。

いや、これも、やはり言い訳だ。

だから、僕はカレンから顔をそむけながら問う。

「それじゃあ、どうすればいい？この世界を変えるには・・・。」

「戦うのよ。ブリタニアと！」

「戦うか・・・。」

僕は、その言葉に、落胆する。

ブリタニアが日本を蹂躪し、その名前と権利と誇りを奪ったのは許せないだろう。しかし、そこにこだわったままでは、ブリタニアに敵意をむき出したままではだめだ。どこかで折り合いをつけなければ・・・。

いつまでたっても、世界は変わらない。

「そうよ。戦うの。ブリタニアを倒せば、きっと・・・。」

「カレン。本当に倒せると思うのかい？倒せば、本当に変わるのかい？」

「ええ。多分だけど・・・。」

「駄目だ。全然駄目だ。君は、ブリタニアを、世界を知らなすぎる・・・。」

「なら、あなたにはわかるの！？」

カレンが掴みかかってくる。僕も、それにカレンをまっすぐに見据えて、返答する。

「ああ。僕はナイト・オブ・ラウンズだから。」

言い切った。カレンは僕をつかんだ手を離し、後ずさる。

僕は知っている。平和を作る為には、保ち続ける為には、多くの犠牲が必要なのだと。それでも、みんなが平和を望んでいることを、

平和は尊いものであることを・・・。

「僕は、ストレイド家の長子として、そして、軍人として、世界とブリタニアの中枢を見てきた。だからこそ、変えられると思うし、変えたいんだ。世界を、ブリタニアを。」

そして、僕は罪を背負おう、本当の自分を幻影で覆い隠そう。世界が変わるその日まで・・・。

STAGE 6：はずされたチェック part 4

シユタツトフェルト家の迎えに後を任せ、僕が病院を出ると、スザクが待っていた。

「どうしたんだ？」

「しゃべったのかい？」

彼は暗い顔をしながら、そう問いかけてきた。見られていたのか・・・。

「ああ。すまない。」

「謝ってすむ、問題じゃない。なぜ、しゃべったんだ！君が狙われて、命を落としたらどうする！？」

スザクは激昂する。僕は、軽めにそれに反応する。

「大丈夫だよ。むしろ、カレンから噂になった方がいい。ルルーシユが動くだろうからね。それに、僕は、ラウンズだ。そんな簡単には死なないさ。」

「けど！」

「大丈夫だよ。大丈夫だから。」

僕は笑顔を作って、スザクの肩をたたくと歩き出す。スザクも僕の後ろにつくような、形で歩きだす。

まあ、納得はしてくれないだろう。僕が勝手な事をしたのだから・・・。

「なあ、スザク。僕らは軍人だ。そして、その前に人間だ。いつ死ぬかなんて、わからない。」

返事はない。僕は振り返らずに、続ける。

「それからさ、僕やユフィがピンチに陥ったら、君が助けってくれるだろ？」

「買いかぶり過ぎだよ。僕にだって限界はある。」

「それでも、信じてる。」

僕は振り返る。まだ、スザクは怒っているようだ。でも、スザク

だって、頑固な時は頑固なのだから、これくらいは許してほしい。

頑固なことと、これは関係ないかもしれないけど・・・。

「・・・危険なことがあったら、僕にすぐに言ってくれ。」

「ああ。わかってるよ。」

そう言つて、ほほ笑む僕に、スザクは不満の言葉を漏らす。

「・・・君は、卑怯だ。」

その様子に苦笑していると、携帯が鳴った。スザクに断つて、再び歩き出しながら僕は電話に出る。

「はい、ライ・ストレイドです。」

「アリスです。」

「どうだった？」

「監視をしていましたが、篠崎咲世子に不審な点は見受けられませんでした。」

予想の範疇だ。ルルーシュがこちらの監視に気付いているなら、なおのこと、普段の様子と変わらないはずだ。

「ゼロは現れたのか？」

「はい。サイタマゲッターに現れたそうです。手口はシンジユクゲッターと同じでした。コーネリア総督が撃退されましたが、逮捕には至っていません。」

「そうか・・・。」

同じ手口だったとすると、サザーランドを鹵獲しての作戦か・・・あの状況で、出ていくのは、ルルーシュ以外とは考えにくい。

それに、ルルーシュに超能力があることを前提に考えれば、さっきの状況もどうとでもなる。あのルルーシュが本物だったとしても・・・。

そして、あれが変装した偽物だったとすれば、もっと簡単なのだが・・・。

篠崎咲世子は協力していないのか？

しかし、超能力があるという、推理に頼るのは危険かもしれない。だとしたら、ルルーシュを容疑者から外さなくてはならない。何の

力もなしに、彼は反逆など考えないだろうから・・・。

しかし、多くの犠牲を払っても、確証が得られないなんて、最悪ではないが、最低の展開だ。

「これじゃあ、全然駄目だ。」

『申し訳ありません！』

「すまない。こっちの話だから。気にしないで大丈夫だよ。」

僕は、慌てて取り繕う。電話に出ていたのを忘れて、独り言を言ってしまったようだ。

「報告ありがとう。」

『はい、失礼します。』

電話を切ると、ため息をつく。そして、こう告げた。

「駄目だった。」

スザクは複雑な表情をした。それは、友人の容疑が少し晴れたことへの嬉しさと、それでも、ゼロが捕まっていないことへの、憂いのように読みとれた。

それを見て、僕は何も言わずに歩いた。スザクも何も言わなかった。それは、僕らが特派の研究室につくまで続いた。

STAGE 6：はずされたチェック part 5（前書き）

またチエス用語なのですが、ステイルメイトは、簡単に言うと引き分けという意味です。

STAGE 6：はずされたチェック part 5

「これで、ステイルメイトか・・・。」

俺はぼやく。現時点ではどちらも駒を動かす事が出来ない。盤上を振り出しに戻さなくてはいけないだろう。

まあ、それはライの方も同じだろうが、しかし、コーネリアを捕虜にすることが出来れば、こちらがチェックをかけ返せたものを・・・。

「ほう、あれは二重の策だったというわけか・・・。だが、敗北は計算に入っていなかったようだな。」

「ああ、だから、俺は作り出す。ブリタニアに対抗できる軍隊を、国を！」

C・C・に笑われて、俺はもう一度宣言する。今日の戦いで、決定的な差を思い知らされた。目的のためには、俺のギアスだけでは足りない。

「しかし、一種のギャンブルだったな。人は平等ではないことに異論はないのだろうか？」

「ああ。だが、結果的にはうまくいった。それに、望んでいない結果だったとしても、何とかするつもりだった。」

「妹の友人にギアスをかけてでもか？」

「・・・ああ。」

確かに、それに躊躇いはある。結果として、そうならなかったのだから、ホツともしている。しかし、そうしなければならぬのなら、俺はやるだろう。

「そうか。しかし、アリスとかいう娘が監視だとよく気付いたな。」

「ナナリーに近づいてくる人間は珍しいし、それに、ライが転入してから、より頻繁に見かけられるようになったからな。」

ブリタニアという国は弱者を優遇したり保護したりはしない（最低限、車いす用の道などはある）。国としては本当に平等に扱う。

保護しているのは、少数の貴族と民間企業だけだ。だからこそ、結果として弱者は虐げられてしまう。

それにもかかわらず、車いすで目の見えないナナリーに近づくのは、本当にやさしいか、それとも、俺達の正体を知っていて、利用しようとしている人間だけだ。

後者の方が多いことは言うまでもない。

「それで、どうするんだ？」

「ああ、新宿の時のレジスタンスを使う。あいつらには、助けた恩もあるし、目の前で奇跡を起こしてやったのだから、簡単になびくだろう。」

そして、あの中にはカレンもいる。新宿で、紅いグラスゴーに乗っていたのは彼女だろう。だとしたら、イレギュラーに一瞬でも拮抗したその力、使わない手はない。後は、リーゼントの男。扇とか言ったな、あいつは新宿のグループをまとめていたそうだから、それなりに役に立つだろう。

「あいつらに、ギアスは？」

「使わない。カレンに一度使ってしまったているからな。他の奴に使って、怪しまれるのも困る。」

「それでいいのか？本当に？」

C・Cは鼻で笑いながら聞いてくる。まあ、たしかに、ギアスを使って、奴隷を作り出してしまえば、簡単だが、人心を掌握するのにギアスは必要ない。

この力は、あくまでも切り札なのだから・・・。

「まあ、見ておけ・・・。」

「おお、そうか。それじゃ、お休みルルシユ。」

「またお前は他人のベッドで寝るつもりか！？」

「ダメ？」

俺は、C・Cがベッドにもぐりこむのを、掛け布団を引つpegとして止める。ところがこいつは、純粹無垢な顔をして聞いてきた。

お前には似合っていないぞ、この魔女が！

「お前の部屋は別に用意しただろう！」

「あのベッドは使われてなかった期間が長かったのだろう？硬いんだよ。こちらは適度に柔らかい。」

「贅沢を言っな。」

「ケチめ。」

「あのなあ。お前の衣食住、世話をしやってるのは、誰だ……。」

「お前がギアスで操ってる貴族だろう？そして、ギアスを与えたのは私。つまるところ、私は自分の力だけで生きている。逆に言えば、お前は私に養われている状態だな。自分の力で生きていないのはお前の方だ。」

その言葉に、相当腹が立ち、俺はキレた。いや、キレたのだろうか？分からないが急に冷めたような感覚になった。

「屁理屈だな。そもそも、お前が脱出できたのはレジスタンスのおかげ、そして、俺がいなければ、お前は再び囚われの身だった。外の空気を吸うことも、ましてや、きちんとした寝床を得るなんてことなどなかったんじゃないか？なら、お前だって、今の状況に至るのに、運しか使っていない。さらに、俺はこの力などなくても、金なら稼げる。よって、今の状況は、お前が言うようなものではない。」

「では、なんだと？」

「……相互扶助だろう。お前が言ったとおり、共犯者でもあるがな。」

「相互扶助……、おい、なぜ入ってくる？」

C・Cはとたんにいらついた声になる。俺は何でもないように、背を向けて、布団にもぐりこむ。

「俺のことを何とも思っていないのだろう？なら、いいだろう。」

「床で寝ろ。」

「別にいいだろ？俺はお前になど欲情しないし、それはお前も同じのはずだ。そうじゃなきゃ、俺と一緒にの部屋で寝ることすらしない

だろ。」

「それはそうだが、狭くなるだろ！」

その言葉と同時に、C・C・はあろうことか俺に蹴りを入れてきた。痛みに耐えかねて、ベッドから出ると、そこには寝転がりながら、勝ち誇ったC・C・がいる。

「ふん！言葉で勝てなければ、暴力か？」

「別にかまわんだろう？私は、お前に言葉で勝ちたいわけじゃないのだからな。お前こそ、私を力づくで追い出すという、選択肢はないのか？」

挑戦的なその言葉に乗ってしまったたらおしまいだと思って、俺は部屋を出ることにして、扉へと向かう。

「負けを認めるのか？」

「違う。のどが渴いたから、水を飲み台所に行くだけだ。」

「そうか。じゃあ、私は寝るぞ。ルルーシュ」

「ああ、もう好きにしろ。」

そう言っ、俺は廊下へと出る。まったく、あいつと付き合うのは、コーネリアと戦うよりも大変だと思う。

捕らわれる前は何をしていたかは知らないが、どうやって生活していたのだろう。

「ふん、馬鹿馬鹿しい。」

あいつの過去などに興味はない。知ったところでどうなるものでもないだろう。それに、考えなければならぬことは、他に山ほどある。

俺は、そんな思考をながら、夜の廊下を月の光を頼りに歩いた。

STAGE 6：はずされたチェック part 5（後書き）

STAGE 6 終了回です。次回は騎士団お披露目です。お楽しみに。
では失礼します。

S T A G E 7 : 正義を行使する者 p a r t 1 (前書き)

更新がなかなかできなくてすみません。それと、コメントをしていただいた方、返信が遅れてすみませんでした。

STAGE 7：正義を行使する者 part 1

僕はユフィのボディガードとして、サクラダイト分配会議に来て
いる。と言つても、ユフィは見学だけなので、実際には観光のよう
なもので仕事とは呼べないかもしれない。

開始までにはまだ時間があるので、ホテルのエントランスで僕ら
はくつろいでいた。

「こんな形で休暇を貰えるとは思わなかったな」

ふとつぶやくとユフィは少し怒った顔を向けてくる。

「休暇じゃありません。きちんとしたお仕事ですよ？」

僕は苦笑する。その言葉は確かにその通りなのだが、ボディガー
ドと言つても近辺はブリタニア軍がいるし、それほどたいそうなこ
とでもない。まあ、もう一人のボディガードに示しがつかないかも
しれないけど、それはそれだ。

「確かに、その通りですね。失言をおゆるし下さい。ですが、ある
程度の余裕も必要ですよ」

「それはそうなのでしょうけど。貴方にしては、少し緩んでいませ
んか？」

「そんなことはありません。たとえば、嘘になるかな」

確かに緩んでいるのだろう。いや、疲れていると言った方が正し
いか。このところ、ルルーシュの監視について連絡を密にしている
ため、睡眠時間がほとんどない状況だ。

「別に、ついて来てもらわなくとも良かったのですが……」

「そういうわけにはいかないですよ」

ユフィは自分がどういう立場にあるのか自覚すべきだ。それと、
僕が来なければならなかったのには別にユフィの護衛のためだけで
はない。

携帯が鳴ったので、僕は席をはずす。

「はい、ライ・ストレイドです」

『ストレイド卿。アリスです。今、部屋に到着しました』

「わかった。こちらは今、エントランスだ。こちらに来る予定はあるか？」

『今のところは、ないです』

「では、引き続き頼む」

僕は携帯を切って席に戻る。

「お仕事ですか？」

ユフィに尋ねられたので、僕も素直に答える。

「ああ、ちよっとしたね」

そう言って、僕は今回の会議について話題を振る。あまり、先ほどの電話については、触れたくない。というか、その電話に関連している一人がユフィなのだが、知るよしもないだろう。

でも、なんで一緒になってしまふのだろう。休みだからって、わざわざ、ここでなくてもいいだろうに。

STAGE 7：正義を行使する者 part 2

ストレイド卿との連絡を終えて、私はみんなのところに戻る。するとそこには不穏な空気が漂っていた。ミレイ会長が不気味な笑みを浮かべている。

「な、なんですか」

「いやあ、さっきの電話、誰にかけたのかと思ってね」

「彼氏……」

「きゃあ、ホントに!？」

シャーリーさんが反応するが、私は先を続ける。

「とても言っただけだったのかもしれないですが違います。妹ですよ」

「ふーん。果たしそれは真実なのでしょうか？」

「嘘言っただけなんですか」

会長に疑いの目を向けられるが、そもそも会長は生徒全員、ことに生徒会メンバーについては家族関係くらい分かっているはずだ。だから、嘘を言ってもしょうがないことは、ここにいる全員がよく分かっているだろう。

「嘘なのですか？」

ナナリーは不安げな声で聞いてくる。素直なナナリーが信じてしまったようだ。私は内心で舌打ちをしながら、ナナリーの手を握る。

「私は、妹に電話しました」

「嘘じゃないですね」

「だそうですか？」

「むー、残念。ナナリーが嘘じゃないって言うなら、そうなのよね」
ため息をつきながら、本気で残念がるミレイ会長。全く、この人の脳内にはどうなっているのだろうか。

ストレイド卿だけでなく、妹にも連絡を入れておいて良かった。

「それじゃあ、暴露大会を始めましょうか。テーマは恋愛!」

電話をしている間に、何やらとんでもないことを始めようとしていたらしい。今度は私がため息をつきながらもその輪に加わる。興味はないけど、ここで抜けるのも不自然だしね。

STAGE 7：正義を行使する者 part 3

特派のトレーラーで、僕は機体チェックをしていた。ランスロットが出撃する状況などないだろうが、一応やっておかなくてはならない。

それにしても、サザーランドとは比べ物にならない反応速度だ。サザーランドを基にしたシミュレーターはこちらが合わせなくてはいけなかったが、この機体はついてきてくれる。

「どう、スザク君？」

セシルさんが声をかけてくる。

「はい。どこも異常はないです」

「じゃあ、ご飯にしましょう？」

思わずびくつとなる。音声通信だけで、表情と様子がばれなくてよかった。でも、それだけの恐怖を感じさせるものがセシルさんの料理にはあるのだ。

「時間がなくて、レトルトだけどいいかしら」

ほっとした。どうやら、まともな食事がとれそうだ。本人に言ったら、失礼以外の何物でもないけど。いや、はつきりと言って改善を促したほうが本人のためだろうか。

「はい。大丈夫です」

考えつつも、返事をしてコクピットから降りる。

「あれ、ロイドさんはどこに？」

特派の主任である上司の姿が見えないので、一応聞いてみる。

「シュナイゼル殿下から連絡があつてね。その応対」

シュナイゼル・エル・ブリタニア、皇位継承人第二位にして帝国宰相、特派の監督者でもある。しかし、実際はロイドさんに一任している形になっているとライからは聞いている。

「何かあつたんでしょうか」

「まあ、たいしたことではないと思うわ」

そうなのだろうか。俺がランスロットのテストパイロットを快く思っていないくて、そのことについての連絡だということも十分考えられる。

ライを信用しないわけではないが、それでも、皇帝陛下から命令が下れば、僕をクビにすることも考えなくてはいけなはずだ。

所詮は、名誉ブリタニア人でしかないのだから。

「不安でしょうけど、大丈夫よ。シュナイゼル殿下は、寛大な方だから」

不安を吐露すると、セシルさんはこう言ってくれたが、やはり心配だ。実際にコーネリア殿下は、特派を追い出している。

そこへ、ロイドさんが戻ってくる。満面の笑顔だ。

「おめでとー！発進するかもしれないよ」

「どういうことですか？」

「いやあね。ホテルがジャックされたんだって」

さらつと、そして、嬉々として言う事ではないですよね。ロイドさん。

「何をさらつと言ってるんですか!？」

セシルさんも声を荒げている。ロイドさんは優秀な人物なのだが、人を人とも思っていないところがある。セシルさんの苦労を考えると直したほうがいいと思う。

しかし、ロイドさんの性格も、先ほどの不安もどうでもいい。ジャックされたホテルには、ライとユフィ、生徒会の皆、そしてナナリーがいるのだ。

焦る気持ちを抑えながら、僕は言った。

「詳細を教えてください」

STAGE 7：正義を行使する者 part 4

私は、ナナリーと共に別の部屋に隔離された。そこへ、恰幅のいい男と、つき従って二人の男が入ってきた。

「ふふふ。お変りはないようですね。ナナリー皇女殿下？」

恰幅のいい男が話しかけてきた。その声は高圧的で、こちらに好意的なものだとは、到底思えない。ナナリーは、少しおびえた様子を見せながらも言葉を返す。

「・・・どなたですか？」

「そうですね。お忘れでも、無理はありますまい。私は日本解放戦線の草壁である」

草壁と名乗る男は声を張り上げる。そんなに大きな声を出さなくても、聞こえてるわよ。

私がそんなことを考えていると、草壁はこちらを睨みつけてきた。表情には出していないが・・・。

「ナナリー様。今、私がここに来たのはお願いがあるからです。我々にお力をお貸しして頂きたい」

ナナリーは、身をこわばらせた。警戒度が一気に最大まで上がっている。彼女は表情を曇らせることはあっても、強張らせることはまれなのだ。微妙な変化なので、この場では、私にしかわからないかもしれないが・・・。

草壁はさらに、高圧的に言葉を放ってくる。

「コーネリアと交渉していただきたい」

「嫌です。あなたたちの行動は間違っていると思います。こんなに多くの人を巻き込んで！」

「それをやらせているのは誰だと思っている！？ブリタニアは間違っていないのか！？それに、あなたは恨んでいないのですかな？あなたを捨てたブリタニアを！」

気丈に言い返すナナリーだったが、さらに高圧的な態度で迫って

くる草壁。私は、ナナリーに握られた手を、ぎゅっと握り返すことしかできない。ナナリーがいる以上、下手な真似をすることはできない。

「それでも、私はあなたたちに協力することはできません」

「そうか。だが、こちらも引き下がるわけにはいかんだ！」

そういつて、草壁は刀を引き抜き、私に突きつける。そして、ナナリーにこう言った。

「どうしても嫌だというのなら、ナナリー様の友人の首が飛ぶことになります」

「！」

ナナリーの雰囲気が変わる。脅しが効いているのだろう。あからさまに、動揺してしまっている。

「なんて、卑怯な……」

「どう申されようと結構。三十分後にまた来ます。それまでにご決断を」

ナナリーに向かってそう言い放つと、彼らは部屋を出ていった。

さて、どうしたものか、おそらく、外に一人は見張りがついているだろう。

様子を伺うために、扉に近づいて耳をそばだてる。しかし、防音処理がされているのか、外から音が漏れてくる気配はない。

「何とかしなくちゃ……」

そう呟いたのはいいが、今の私にはどうすることも出来ない状況だった。せめて、ストレイド卿と連絡が取れればいいのだが、携帯は取り上げられている。さらに言えば、武器もない。なんて、無様で無力なのだろう。

「アリスちゃん……」

ナナリーが私に不安げな声で話しかけてくる。

「大丈夫よ。きっと大丈夫だから」

「ごめんなさい。私のせいで」

「気にしないで」

私は本心からそう思っている。ナナリーを守るのが私の仕事で、それ以上にナナリーは大事な友人だから。

私は、ナナリーの手を握る。ナナリーは、ほっとしたように笑顔になる。

そのとき、突然、扉が開いた。

STAGE 7：正義を行使する者 part 5

「民間人を助け出す」

河口湖に向かうアジトの中で、誰にともなく俺は宣言する。その言葉に、集まった新宿のレジスタンスグループの一部は怪訝な顔をする。まあ、少なくとも全員が疑問に思っているはずだ。

「なあ、ゼロ。教えてくれないか？民間人とはいっても、ブリタニア人だ。救う理由なんて……」

その疑問を解消すべく、扇が俺に言葉を投げかける。

「その通りだ。しかし、考えてみる。草壁たちの行為に何の意味がある？なにもありはしない。彼らは、自分たちの存在を誇示したいだけだ」

「確かにそうかもしれないけどよう。それでも、ブリキ野郎を助け出すのには抵抗があるぜ」

俺はすべてを話したわけではない。不満があるのも当然だろう。

「違うな、間違っている。本気でブリタニアと戦うなら、今までとは認識を変えなくてはいけない。ブリタニア人と戦うという、考えではなく、ブリタニアという国と戦うと考えなくては駄目だ。ブリタニアの人々も体制がこうだからといって、無差別に攻撃されたのではたまったものではないだろう。例えば、玉城、お前は生まれたばかりの赤子まで、ブリタニア人だからといって殺すのか？」

「そ、それは、さすがにしないけどよ……」

「そうだろう。それと同じことだ。その為に我々は、正義を行う！」
レジスタンス達は渋々納得したようで、出発の準備を始めた。俺は一人、自室へと向かう。

内心ではほっとしていた。これは、騎士団のデビューという意味合いがあるが、しかしながら、私情もはさんだ作戦だからだ。

草壁たちが立てこもっているホテルには、生徒会メンバー。そして、何よりも大切なナナリーがいるのである。今動かなくては、だめな

のだ。

「Ｃ・Ｃ・準備はできているのだろうか？」

自室に戻ると、俺は自室のソファで、くつろいでいるＣ・Ｃ・に問いかける。今回の作戦では、こいつの力も重要になってくるのだ。

「ああ」

「仕事が早いな。お前にしては」

「ああ、お前に死なれては困るからな」

俺が皮肉交じりに、発した言葉にＣ・Ｃ・は大まじめに返答してきた。そして、さらにこう付け加える。

「なあ、シスコン童貞坊や？」

いつもの通りだった。

しかし、こちらにも慣れたもので、軽くあしらうことにする。感情的になるからいけないのだ。

「まあ、否定はせんよ」

「なんだ、つまらん」

「すまないな。今は、構っていられる状況ではない」

「まあ、そうだろうな」

「そういうことだ」

俺は、そう言いながら、パソコンに向かう。コーネリアの動きを確認するためだ。俺の推測が当たっていれば、まだ、攻勢には出ていはずだが……。

STAGE 7：正義を行使する者 part 6

「ストレイド卿からの連絡は？」

「いえ、ありません」

私は焦っているのだろう。声がいつもよりも厳しいのがわかる。ユーフェミアが捕らわれている。ライの身にも危険が及んでいるかもしれない。実際に民間人が一人殺害された。しかも、ことごとく作戦は失敗し、地下道の突破もテロリストの用意した兵器によって失敗している。

しかし、テロリストに屈するわけにはいかない。

「特派を使つてはいかがでしょうか。罔くらいにはなるかと」

「特派を？」

ダールトンの言葉に私は逡巡する。それは、私の理念に反する。ナンバーズを罔に使うなどと……。

いや、私が言えた義理ではない。ライが言うとおり、私はそんなことを考えていいほど、甘い立場にはいない。

そう、私に求められているのは勝利だけだ。

「殿下。ゼロが、ゼロが現れました！」

私が決意をしたところに、奴はやってきた。

テロリストたちは、銃器で僕らを脅し、食糧貯蔵庫に放り込んだ。今もその状況は続いている。僕は動こうにも動けなかった。民間人に犠牲が出る可能性が高いし、下手に動いても、密集度が高すぎて、失敗するのは目に見えている。

とりあえず、ユフィの正体はテロリストに知られていないのが救いといったところだろう。彼女を利用されるようなことになれば、コーネリア殿下も屈服してしまうかもしれない。

ただ、先ほどテロリストに連れて行かれた男性がまだ戻ってきていない。殺害されたと考えるべきか……。だとすれば、あまり時間は残されてはいないかもしれない。

さらに、アリスとナナリーのことも心配だ。どこか別の部屋に閉じ込められているのだろうか。

だが、なぜ？

考えられるのは、草壁という男が、ナナリーが皇女であることを知っていて、交渉に使うとしてしていることだ。

それは、色々と都合が悪い。

「お姉さまは動かないのでしょうか」

ユフィが静かにつぶやいた。それは、本当に小さな声だった。下手をしたら、僕も気づかなかっただろう。

「そうだな。君がいる限り、総督が強攻策に出ることはない」

殿下はユフィを溺愛しているから、正面突破はしてこないだろう。それ以外の策も、今の状況を考えると失敗しているか、実行されていないかのどちらかだ。

ユフィはほつとしたような表情になる。

「それなら、まだ時間はありますね」

僕は不穏な気配を察知して口を開こうとしたが、それと同時に声上がる。見ると、テロリストの一人が少女の腕をつかんでいた。よく見るとその少女はニーナだった。

必死に抵抗しているが、このままでは何をされるか……。

「いけません。副総督」

もう一人のボディガードの声に振り向くと、ユフィが立ち上がった。

「その人を離しなさい」

しまった。最悪な展開だ。この後に続く言葉はおそらく……。

「私をあなた達のリーダーに合わせなさい。私はブリタニア第三皇女、ユーフェミア・リ・ブリタニアです」

やはり、交渉に行くつもりだ。こうなったら仕方無い。どよめき

が起こり、その場の全員が彼女に注目している中、僕もすつと立ち上がる。

「ライ？」

テロリストが僕の方をいぶかしんで見ているのを尻目にユフィとテロリストに告げる。

「交渉をさせてほしい。彼女の身分は僕が保証する」

「誰だ。お前は！？」

「ライ・ストレイド。母は皇霧江。これだけ言えばわかるだろう？」

「な！？裏切り者の……。そうか、お前がストレイド公爵の息子か」
テロリストの言葉に、少しだけ顔を歪ませる。

「ああ。そうだ」

「わかった。こちらへ来い」

ニーナから手を離し、手招きするテロリストのもとへ向かう。スザクにまた怒られそうだな。

STAGE 7：正義を行使する者 part 7

ゼロがホテルに交渉に向かったらしい。だが、そんなことはどうでもいい。今は作戦を成功させることだけを考えよう。

ランスロットが地下道に降ろされ、前を見据える。前方には敵の兵器がある。突破するとすれば、確実に撃破しなければならない。

新宿ゲッターの時とは違う。今回は本当に生身の人間を殺さなければならぬだろう。だが、迷いはない。あそこには、大切な人たちがいる。その人たちを守るためなら、何度でも人を殺し、生き残る。

この繰り返しを、僕は生きている限り続ける。その先に救いがないとしても、それで、少しは日本人に対する風当たりが減ると信じて……。

もちろんこれは、独りよがりな意見だ。でも、誰に非難されようと構わない。誰かを不幸にするのも構わない。

だから……。

「ランスロット、MEブースト」

「ランスロット、発進！！」

セシルさんの声と同時にランスロットを全速で発進させる。しばらく進むと前方からは散弾が襲いかかる。

即座に反応し、回避。損傷はない。

「よし、いける！」

テロリストに連れられて、リーダー 草壁と言っただろうかのいる部屋に辿り着いた。そして、部屋に入ろうとした瞬間。銃声が鳴り響いた。

「中佐！」

テロリストの一人が中に突入するが、肩を撃たれてうずくまる。その視線の先にはゼロがいた。

「落ち着きたまえ。中佐たちは自決なされた。行動の無意味さを悟ったのだ」

この状況で？

そんなはずはない。草壁たちは優勢に立っている。コーネリア殿下が攻勢に出られないのだから、それは確実だ。それに、最初に僕ら人質に向かって言い放った言葉を見ると、自尊心が高そうな気がする。そんな人間が自殺をするとは思えない。

だとすれば、答えは一つ。ゼロは草壁たちを操ったのだ。そうでなければ説明がつかない。

「コーフェミア副総督とそちらのボディガードの方、こちらへお入り下さい」

まずい。ここでユファイが操られたら……。

僕はとっさに言葉を紡ぐ。

「いいのかな？僕は君を取り押さえることもできるけど……」

「無理だな。廊下を見てみたまえ。今、君達には複数の銃口が向けられている」

ゼロに意識を向けつつ、廊下に目をやると、数人が黒服に黒のサンバイザーという格好で僕らに銃を向けていた。

なるほど。下手に動けば、蜂の巣か……。

「わかりました。それに、私もお話したいことがありますし」

僕らは部屋へと入る。

ユファイは冷静だ。だが、油断は出来ない。ゼロがルルーシュであるうとそうでなかつたら。

「ゼロ。率直にお聞きします。なぜ兄を、前総督を殺したのですか？」

ユファイの言葉をどう思っているのかは、仮面に隠されてよくわからない。だが、何ら動じていない様子を見ると、何とも思っていないのだろう。

「理由は二つ。一つはシンジユク・ゲッターの日本人虐殺を命じたこと」

ゼロは語り出す。確かに、それは事実だ。クロヴィス殿下が行ったことは許されることではない。しかし、それを語ることはお前があの場にいたことを示している。あの場のことは、民間には伝わっていない。

「もう一つは、彼がブリタニア皇帝の息子だからです。そう言えば、あなたもそうでしたね」

ゼロは銃を向け、僕はユフィをかばう。

「しかし、今は……」

撃つつもりはないようだ。ほっとしながら、ゼロを見据えていると、部屋に人が入ってきた。

「ゼロ、脱出の準備はできた。もう一つの仕掛けも、もうすぐ終わる」

「そうか。この二人を案内しろ」

そう言うゼロはさっさと部屋を出て行くとする。

「何をするつもりだ」

去り際にかけた僕の言葉に、ゼロはあざ笑うかのような口調でこっぴどく言った。

「ちよつとしたシヨウだよ」

STAGE 7：正義を行使する者 part 8

五回目の攻撃も何とか防ぎ、さらに接近する。しかし、それに従って回避に使える領域は、どんどん狭まっていく。

こうなれば、ここでヴァリス（ライフル）を使うしかない。

それを伝えるとセシルさんは悲鳴に近い声で止めてきたが、そんなことを悩んでいる暇はない。やらなければ、こちらがやられる。

「爆風は覚悟の上です！」

そう言っただけで照準を合わせる。そして、敵機が弾丸を放った瞬間。こちらと同時にトリガーを引く。ヴァリスの弾丸は敵の弾丸を破壊し、さらに敵機に届く。

直後、爆風が荒れ狂い、トンネルに大穴をあける。とっさにそれを利用して、水面上まで飛び出ると、ライフルの設定を変更。そして、目標物である柱を撃つ。

ビルが揺れ始めた。何かかと思いつながら、窓の外を見ると、あの時の白兎が見える。ええい。もしかして邪魔するつもりか。

『ゼロ、準備完了。いつでもいいわ』

ちようどいいタイミングだ。では、始めようか。正義の味方を。

ホテルの中にゼロの姿を認めたが、その直後、ゼロは何かのスィッチを押した。同時にホテルから爆炎と煙が上がり、崩れ去っていく。

「みんな！」

そう叫んで、何も考えずにその中にランスロットで飛び込んだ。

煙が晴れる。白兎は健在のようだ。しぶとい奴。

……まあいい。

周囲からスポットライトが当たる。

「ブリタニア人よ。動じることはない」

俺は人質を助けたことを告げ、さらに宣言する。

「人々よ。我々を恐れ、求めるがいい。我々の名は黒の騎士団」

ライ、ユファイ、そして、コーネリアよ。見ている。これが、俺のブリタニアを破壊する戦いの始まりだ。

「私は、ブリタニアの思想すべてを否定しない。しかし、強者が弱者を一方的に殺すことは許さない」

そうだ。ブリタニア皇帝。俺は絶対にお前を許さない。俺とナナリーを捨てたお前を、母さんを見殺しにしたお前を、そして、弱者をゴミ以下として扱うお前を、俺は許さない。

「前総督クロヴィスはシンジク・ゲッターで日本人を虐殺した。だから、制裁を加えたのだ。そう、撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ」

必ずや、皇帝を倒し、ブリタニアを破壊し、こんな腐った世界を変えてやる。

「力ある者よ。我を恐れよ。力無き者よ。我を求めよ。世界は、我々黒の騎士団が裁く」

そして、ナナリーが安心して暮らせる世界を……。

S T A G E 7 : 正義を行使する者 p a r t 8 (後書き)

騎士団お披露目会終了です。次回をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1954f/>

コードギアス反逆のルルーシュ 幻影のライ

2010年10月12日19時01分発行